
墓守キッショムのおとぎ話

maruzhiye

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墓守キッショムのおとぎ話

【Zコード】

N5274X

【作者名】

marunhiye

【あらすじ】

この物語は、ヨーロッパ風（設定はフランスですが、架空の世界です）のある教会から始まります。

主人公キッショムはソルマウント教会の墓守をしている若者です。ソルマウントの墓守、それは夜な夜な墓場から這い出てくる死人たちの世話をする仕事。そしてデスダスト、死人を腐敗から救う薬をつくることだった。

友人である謎の死人、スタンリー・ベルフォードとともに町に現れる怪物たちと戦うはめになり、そのことでキッショムの人生が大き

く変わっていく…。というストーリー。

この作品は他サイトと重複予定です。

プロローグ『地獄の入口』

プロローグ『地獄の入口』

『むかし、むかし…。

あるところにルカという墓守がありました。
彼は地獄から地獄の炎を持ち帰りました。

その炎をすることによって何年もかかっていたデスマダストの製造
が、

たつた数日でできるようになりました。

死人たちはデスマダストを使って腐敗を防いでいたので、
大喜びしましたとや……』

赤い炎渦巻く地獄の大地。

天を覆う炎はまるで流れる雲のようにゆらゆら揺れている。
大地は黒い土に埋め尽くされ、河となつた血が湯気を立てて流れてい
いく。

溶岩のように噴出した血が亀裂となつて見渡す限り広がつていて、
風が吹きすぎ、赤い落雷がところ構わず落ちている。
雷鳴がどどろく中で人間の悲鳴が遠くから、つなるように聞こえて
くる。

そんな地獄に一人の墓守がやってきた…。

一人は大きな黒い修道服姿の男。大きな艶のあるマントを羽織つて
いる。

もう一人は幼い子供。小さな薄汚い白い修道服を身に着けている。

赤い炎は彼らを見つけた。炎は渦となつて地表に落ちてくる。帰れ
…！帰るんだ！ここはお前たちがくるところではない…！

幼い子供は肩をすぼめて男のマントの中に隠れた。
男はマントで幼い子供を包んでやつた。

大地の黒い土は耳をそばだてた。おまえらはいつたい何者だ…、聞
き逃すものか…！聞き逃すものか…！

『われわれ墓守は命を懸けてきたのだ…。デスマストを少しでも完
璧なものにするために…。見るがいい、ここが我々の聖地だ…』

落雷は更に数を増やした。雷鳴^ガがどじろく…。やつらが来た…！
奴らが来たんだ…！墓守が来た…！
幼い子は体を震わし男の足にしがみついた。

『いいか、キッショム約束してくれ…、決して捷に背かないと…。
捷は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せ

なかつたが、彼らはわたしたちにいくつかのタブーを残したのだ…、わかるな?』

地表を流れる赤い血は怒りで煮えたぎった。ルカ…。ルカ…。あのコソ泥が!! 墓守が!!

幼い子供は必死に頷いて見せた。男が幼い子供の頭に手をのせ跪いた。

『もう帰らひ…』

風は猛威を振るつた。恐ろしい勢いで彼らを取り囲む。帰すものか…!お前たちをハつ裂きにしてやる!!

幼い子供の目から大粒の涙がいくつも落ちる。

『帰らう…。墓守は地獄の入口からけつして足を踏み出してはならない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのはここまでだ…』

幼い子供は手を伸ばし男の首に手を回しげみついた。

風は地獄の亡者の叫びを彼らの耳に運んだ。たすけて…たすけて…。聞こえるか?聞こえるか!…この叫びを!

さあ、一歩踏み出すんだ!! 一歩でいい…そうすればお前らをハつ裂きにしてやるのに…!!

男が幼い子供を抱き上げ立ち上がる。まるで立ち上る湯気に飲み込まれたかのよう一人の姿は消えてしまった。

天の炎は荒れ狂い地上を焼き尽くさうとする。

落雷は地上のあるあらゆるものを破壊し隠れ場所を奪おうとする。

雷鳴は叫び声をあげ地上を搖るがした。

黒い大地は彼らを探すためさらに耳をそばだてた。

風は吹き荒れ気が狂つたように地獄を駆け巡った。

地獄の亡者の苦しみは増し、阿鼻叫喚の世界が地獄を埋め尽くした。

ハツ裂きにしてやる……！ハツ裂きにしてやる……！

しかし、その声を聴くべき者はすでに地獄を去つたあとだった……。

1・キッショムとスタンリーベルフォード

灰色の道と微かに揺れる木々を月の明かりがやさしく照らし出している。遠く山々のシルエットは夜の闇に深く腰を下ろしていた。虫たちはまるで囁きあつてゐるかのように静かに泣いていた。その夜の静けさのなかに一層濃い影を落とす若者がいた。季節外れの灰色のマントを肩にかけ、フードで頭をすっぽりと隠している。

ソルマウント教会は遠く町から離れ、深い森に囲まれている。その教会の墓場を囲う柵に腰掛け、キッショムはぼんやりと月を眺めていた。オーハン・キッショム・ギボンズ、それが彼の名前だつた。微妙にカールした黒髪は不ぞろいで乱暴に切つてあるだけなのがそれとわかる。黒い瞳は深い一重で、寝不足の腫れぼつた目をしばしばさせていた。頬にうつすらとそばかすがあり愛嬌のある幼さの残る顔立ちをしている。

月は掛布団を引つ張り寝返りをうつたかのように黒い雲の向こうに顔半分を隠してしまった。虫の声に耳を傾けると、虫たちの泣き声はさらに声をひそめて、やがて暗い木々の陰に消えてしまった。キッショムは深いため息をついた。頭を垂れ目線を汚れた黒いブーツに落とす。汚れたブーツの向こうに灰色の地面が広がっている。柵から降りると立て掛けおいた鉄の鉤棒を手に取つた。まるで地面に引っ張られているかのように重く、ずつしりとしている。鉤棒の先は三つ又に分かれ、まるで鷹の爪のように鋭く曲がつてゐる。三つ又に分かれた鉤棒の先は一本だけ新しく溶接され、微かな月の光を受けて銀色に輝いていた。指でその一本を撫でながらまたキッショムはため息をつく、その時だつた。微かに教会の窓が揺れた気がした。いや揺れたのは窓ではない。教会の行動に大きな窓がいくつかあり、そのひとつがどうやら開いているらしい。窓は地面につすらと温かい光を投げていた。

『揺れたのは光だ…』

キッショムは舌打ちをすると手にずつしりと乗りかかっていた鉤棒を持ち上げ、地面を弾いて飛び上がり、なんなく柵を飛び越えた。まるで猫が暗い夜道を横切るよう首を低くし音もなく墓場をかけていく。窓の傍にたどり着くと壁に背中を押し当て中の様子を伺う。息を殺し耳を澄ます。物音一つしない講堂の中に入るのを感じる。キッショムは鉤棒を握りしめた、しかし自分では気づかぬうちに口元に微かに笑みを浮かべていた。

『わかつてゐるんだ…。僕の様子を伺つてゐるんだらう……』

キッショムは心中でそうつぶやくと窓枠に手をかけ一気に講堂に飛び込んだ。

その時だ、恐ろしく鈍い音が頭に響いた、額を激痛が襲い目の前が激しく揺れた。

「あが…！」

講堂にいた男も窓に顔を近づけていたらしく額同士を激しくぶつけたのだ。男は低いうなり声を上げながら地面をのた打ち回り、テーブルの下に転がり込んでしまった。

「くそ…！」

キッショムもはげしい痛みに耐えかね額を抑えながら、こぶしで壁をなぐりつけ悪態をついた。左目からとめどなく涙があふれる。どうやら目もしたたかぶつけたらしかった。男はテーブルの下に潜り込んでしまつたまま。瞬きを繰り返し床に横たわる鉤棒を見つけた。鉤棒に手を伸ばすと一本のロープが床の上を蛇のように滑り、キッショムの足を掴もうとした、慌てて足を上げ蛇の頭を踏みつける。ロープはぴんつと張り、キッショムの足の下でもがいている。

キッショムは笑みを浮かべ腰をかがめて鉤棒を握った。テーブルの下をのぞき込みむと血色の悪い青白い顔をした男が向こう側でにやにや薄ら笑いを浮かべている。暗いテーブルの下に浮かぶ顔、緑色に変色した隈の上にブルーの瞳。眉が楽しげに上下する。

キッショムの口元から笑みが消えると同時にロープが激しく波打つ。男はロープを縦に振るう、一瞬にして蛇が息を吹き返したかの

ように空を切り裂き、幾重にも波を打つた。蛇はキッショムの右ほほを激しくひつぱたき、講堂に激しい音を響かせた。

「ぎやっ…！」

今度は右目から涙があふれ出した。

「おいおい、大丈夫か…？」

キッショムが床にふさぎ込むと男はテーブルの上に顔を出した。その瞬間握っていたロープがテーブルの下に男を引きづり込もうとした。男の顎が激しくテーブルに打ち付けられた。

「うぐっ…！」

「ははは…！」キッショムがロープを持つて立ち上がった。

「ぐう…ふざけんなよ…」

「どっちがだ！スタン、君は地下室からでちゃだめだろ？みんなに見つかったらまた大事だよ」

「ちょっとお前を探しに来ただけだろ？それに、講堂の外には一步もでてないぜ？」

「一步たりとも出すもんか！くやしかつたら出てみなよ、どうせ戻ってくるんだから！」キッショムは息をのみながらスタンリーを激しく睨み付けた。

「はあ？…ロープ離せよ…」スタンリーのキッショムを見つめる目がすわつていて。青白い顔は血が通っていない証拠だった。彼は死人だからだ。金色の美しい髪は白く成り果てていたが、肉体はいたつて衰えていないようだった。ロープを握る腕はまるで鋼を磨いたかのような光沢を放つていたし、ロープをまるで自分の体の一部のように扱うことができた。

「いやだ…」

「ああ！？」

「今日はこのロープで君を縛り上げてやる…」

「…いうじゃないか…はなせ…」

「いやだ！」

二人はロープをきつく握りしめ強く引いたり緩めたり、引っ張り

合いを幾度となく繰り返した。その度にテーブルはガタガタと音をたてる。

二人の綱引きは引けば引くほどますます激しくなり最後には頭の上に持ち上げ激しく引きあつた。一人がはたと我に返つたときには時すでに遅く大きな六人掛けのテーブルが宙を舞つていた。テーブルは隣のテーブルの上に激しく乗り上げ、椅子の上に転げ落ちた。凄まじい音が講堂に鳴り響いた。

「ああ…」

「キッショム、今のはまずいだろ?…」

「いそいで! もとに戻すんだ!」

「あ、ああ…」

キッショムがテーブルに駆け寄ると遠くから足音がバタバタと聞こえてくる。キッショムが講堂の扉に手をやつた。ドアを激しく叩く音、キッショムを呼ぶモリスの声が聞こえた。ドアノブがギシギシと鈍い音を立てて回りはじめる。そして、空を切るロープの音。ロープはまっすぐドアノブに飛び、激しく波打つた。グーヤリと首をねじると観音開きの二つのドアノブに食らいつき巻きついた。スタンリーがぐつとロープを引っ張ると固く結びついた。モリスがガタガタとドアを揺らしている。

「キッショム! いるんだろう! いつたいそこで何をしているんだ!」

スタンリーは顎に手を当てて何か考えている。キッショムと目が合つと手をあごから離し、指先を口に当てだまつていて促した。

「キッショム! ここを開けるんだ!」モリスが扉をたたく音が講堂に響き渡る。

スタンリーは鼻から息を吸いドアをじっと見つめた。

「…にゃ、にゃあー…お…」

「え…」

講堂が冷たい静寂に包まれ、いつもの威厳を取り戻したかのように思えた。できればこの静寂が永遠に続けばいい、キッショムはそう思った。

田の前に立つスタンリーは静寂に聞き入り満足げに指をたて、笑みを浮かべた。

なんのことはない、いまこの瞬間、キッショムの恐れる最悪の事態を作り出したのはほかないこの、スタンリー・ベルフォードだ！
「スタンリイイ！」ドアの向こうでモリスの金切声が上がる「スタンリー・ベルフォード！そこにあるんだな！」ドアを叩き、今にもぶち破らんばかりだ。

キッショムはドアに駆け寄った。ドアに手をあて意を決したようにこづいた。

「…スタンリーは、確かにここにいる…」

スタンリーは慌ててキッショムに手を伸ばしたが、すぐにあきらめ首を振った。

「聞いてくれ！モリス、扉を開けちゃダメだ！その…デスダストが講堂に充满してるんだ、新しいデスダストを作ったんだ！」モリスが扉を叩く音が止まった。

「それで、ディブイがぶつ倒れたんだ、痙攣をおこして白目を向いてる、外の空気を吸わせるのにスタンが手伝ってくれたんだよ！…ディブイの巨体は僕一人じゃ無理だろ！？」

「キッショム！見てくれ！ディブイの奴、口から緑色の泡を吹きだしたぞ…！」

スタンはにやにや薄ら笑いを浮かべながら叫んだ。キッショムが睨み付けると我知らずを決め込んだ。

「ああ…いまこにはデスマストに汚染されてるんだー…明日にはもと通りだ約束するー！」

「ほ、ほんとうにもどおりになつてるんだろうな…！？」ドアの向こうでモリスの弱々しい声が聞こえる。

「ああ、大丈夫、明日にはすべてもどりだ」

「キ、キッショム、まかせたぞ。私は明日はやく神父様を教皇議会にお連れしなくてはならないのだ…」

「わかつてゐる、おやすみ！寝坊したら大変だ」

「やう、やうだな…、じゃあ、頼んだぞ…」モ里斯の逃げるよう遠ざかっていく足音を、ドアに耳をあてて確かめるとキッショムはほっと胸をなでおろした。

「機転が利くな、はは。さてとこのテーブル片づけて、わざわざ下室へ行こうぜ、酒盛りとこひつ」スタンリーは手をひとつ叩いた。弾ける音が講堂に響き渡る。

「ああ…」

スタンリーは気のない返事を聞くと転がる椅子を片づけようとするキッショムを見つめた。

だまつて椅子を片づけていたキッショムが机に手をかけるとスタンリーは慌てて机に駆け寄り手伝った。

「みんな、お前のことを待ってるんだ」スタンリーがキッショムの目を見つめた。キッショムは笑って見せただけだった。その笑みはどこかさみしく、スタンリーを不安にさせた。

「地下へいこ…」

スタンリーが何か言おうとするのを遮つてキッショムはそういうと歩き始めた。手に付いたほこりを払いながら壁に並ぶ蠅燭台の一本を力強く引いた。低い音が響く、教台の傍の床が動き出し地下へ降りていく階段が現れた。

スタンリーは階段に向かうキッショムの後姿をぼんやり眺めるのをやめ、慌てて後に続くのだった。

2・肉屋の娘、マルゴーとアルト、そして『踵にバネを持つ男』

暗い闇がグレスデンの町を包み込んでいた。夜に漂う黒雲に月が完全に覆われるとグレスデンの町の灯さらに温かく光り輝くのだが、今日は少し違っていた。この日はぼんやりと霧が漂っていた。光はかき消されるように遠くに感じるばかりだった。そしてこの霧が数日間グレスデンの町にとどまるることをこのとき誰も予想してはいなかつた。

タムズの肉屋の看板が海の上を漂う船のように霧の中にぼんやり浮いている。大きな豚の横顔にタムズと書かれたその木製の看板は扉の傍に太い2本の鎖でぶら下げられていた。タムズの店に代々うけつがれてきた自慢の看板だった。

タムズの肉屋は、口数は少ないが太った氣のいい父親と一人の娘が商売をしていた。母親はすでに他界し、店主は口数が少ないが、しつかり者の姉のマルゴーがお金を管理し、愛嬌のある妹のアルトが客の相手をしており、娘たちのおかげでタムズの肉屋は繁盛しているようなものだった。

店内では二人の姉妹が慌ただしく口だけを動かし後片付けをしている。姉のマルゴーは妹の恋人について納得がないらしくここ数日小言を言い続けているのだ。アルトはずつと姉のご機嫌をとりながら話をしていたが、まるで壁に話しかけているような気分だった。話しかけるたびにつらく、不安になっていく。

「姐さん、フランクは丈夫な靴をつくれるわ。いちど彼に靴をつくつてもらいましょう」妹のアルトは 大きな肉の塊を木の盆にのせ、無理に笑みをつくりながら言った。横目で姉の反応をじっと見ている。

マルゴーはそのキリットした眉をピクリとも動かさない。整った顔立ちと薄い唇、聰明でとても美しい女性だ。しかし、人の目を見て話すことをしない、それでいてはつきりとした口調や冷静な物言

いをする。それは彼女が動搖して目をあわさないのではなく、目の前にいる人間を相手にしていない証拠だ。そしてその仕草や話し方があらゆる人間に冷酷な印象を与えていた。

「ふざけないでちょうどだい。わたしの靴はテニスのつくりたものよ。親方の作つた靴は一番丈夫だもの、それに息子のアーティスが跡継でしょ。フランクは職人じやないわ、ただの使用者でしょ」「そう、そうよ、ただの使用者。そう…、だから、その…あたし、思い切つて言うわ！」アルトは一度持ち上げた氣の盆を再びテーブルに置いた。いや、勢い余つて叩きつけたのだ。マルゴーは驚いたようにアルトを見つめた。

アルトの大きな瞳がまっすぐ自分を見つめていた。ほつれた髪が頬に張り付き一日の労働の疲れをあらわしていたが、小柄な顔に大きな瞳、小さな鼻先が微かにうえを向いていてとても可愛らしい。笑うと驚くほど大きくなる口がいまはきつく結ばれている。両腕をテーブルにのせ身を乗り出してくる。マルゴーは気迫に押されるよう上半身をのけぞらし、手に持つていた木の桶をきつく抱きしめた。

「な、なによ…。言いたいことがあるならいいなさい…」

アルトは瞳を閉じ深呼吸をした。瞼を弾いて目を見開くと大きな瞳がさらに大きくなつた。

「フランクが言つたの！店を出すつて！一人で店を出そうつて！…あたしたち結婚するの…彼はもう使用者じやないわ、りっぱな靴職人…！」

「わたしに恥をかかせないでちょうどだい！！！」マルゴーは叫ぶやいなや抱きしめていた木の桶をテーブルに叩きつけた。「ふざけないでちょうどだい！ふたりで靴磨きでもやるつもり！？そんなこと、そんなこと父さんも許さないわよ！！！」

いまやアルトの肩はちいさく縮こまり、テーブルに置いていた手は胸元できつく握りあわされていた。瞳からこぼれ落ちそうな涙でゆらゆら世界が揺れていた。

「ねえさん、父さんはいって……ただ……」

「なに？ はつきりいいなさいよ、父さんも許したわけじゃないんで
しょう！？」

「ねえさんが先に結婚しないとダメだつて……」

「なんですかっ！」マルゴーの手が、体が、怒りと恥ずかしさで震えた。「わたしの…わたしのせいだつていうの…」

「…ねえさんが、ねえさんがこの家にいつまでもいるからいけないのよ！」そういうとアルトの目から耐えかねたのように大粒の涙が頬をつたつた。アルトはもうこれいじょう姉の前に立つていてことができなかつた。逃げるよつに駆け出すと一階への階段を駆け上がりしていく。

狭い階段に父親の姿を見た、心配そうにアルトを見ている。なにか言いたそうにしているが口元をまごまご動かすばかりで言葉は出でこない。タムズの太つた体のわきを小さくなつて通り抜け階段を上ると自分の部屋の扉を開いた。暗い部屋の中に飛び込み後ろ手にドアを閉じる。込みあげてくる嗚咽とともに涙があふれ出た。

マルゴーが椅子に腰かけうつむいていると階段に人影をみた。タムズが心配そうにマルゴーを見ている。

「父さん…、いま、一人にしてほしいの…」マルゴーはいつになく力ない声でいつた。

「ああ…、わかっている」マルゴーに背を向け階段に足をかけたが踏み出すことはしなかつた。タムズは低く小さな声でこういつた。

「すまない、お前には先に話しておくべきだったな…。わたしも後悔している、わたしのせいだ、一人を傷つけてしまったようだ…おまえさえよければ、近いうちに式を…」

マルゴーは目を閉じうなづくと、両手で顔を覆つた。

タムズはマルゴーがうなづいたのをみると、少し安心したよう

微かに笑みをみせ階段をあがつていた。

マルゴーは泣いているのではなかつたし、納得したのでもなかつ

た。ただ暗い世界に身を置きたい気分だつた。指先からこぼれてくる光を遮るように指先に力を込めて光をふさいだ。まるで仮面をかぶつているようだ。マルゴーは静かに呼吸をして目を閉じた。

男は顔に張り付いている仮面を手でぐいぐい押し付けている。とりたくても取れないその仮面を押さえつけているのはどこからともなく漂つてくる鉄のにおいが鼻先をくすぐっているからだつた。男の仮面は下半分が崩れ落ち焼けただれた口元があらわになつていて、屋根の上から漂う霧の中に身をなげると通りの石畳に鉄の響く音がこだました。男の体はまるでヤジロベーのように右に左にゆれている、そして体が曲がり普通の男性の半分ほどの大さだ。黒いマントで体をつつみ常に地面に片手をついて体のバランスを取つていた。遠くにぼんやり浮かぶ肉屋の看板を見つけると嬉しそうに鼻をならし、猿のように片手を石畳に擦りつけながら不器用に歩いていく。男の目に木製の看板をつなぐ2本の太い鎖が目に入った。男はにやりと笑うと嬉しそうに肉屋のドアに歩み寄つていく。

マルゴーは目を見開き、両手をテーブルに置いた。唇をきつく結ぶ。アルトがフランクと結婚…？まさかこんなばかげた話をきかされるとは思つてもみなかつた。町の人間が聞いたらどう思うかしら、きっとアルトのことを憐れむにちがいない、わたしがついていながら、そう思うにちがいない。

結婚…、それともわたしはアルトに嫉妬しているのかしら…？わたしのこの結婚に反対していると知つたら町の人間はわたしとアルトに嫉妬すると思うかしら…。許せる、わたしはアルトの姉ですもの、アルトが幸福なら…。

でも、相手があのフランクなのよ…靴屋の使用人のくせして、あの男にどんな靴が作れるというの？売り物の靴を磨くしか能のないあの男にお金が稼げる？稼げるわけない！

店を構えるですって！？あの男は父さんのお金をあてにしてるだけ、

私たち3人で稼いだお金よ。1フランだって渡しはしないわ！

わたしはアルトがかわいい。アルトの幸福を心から願つてゐる、嫉妬なんかじゃない。アルトのためよ、アルトのためなの…。

フランク…わたしはこの結婚を絶対に許さない！あなたを絶対にゆるさないわ。

マルゴーはきつく手を握り、アルトが残していった肉の塊を睨み付けた。うんざりだ、肉屋だなんて…、恥ずかしい…。豚や牛の死肉を切り売りするだなんて…。ただでさえ肉屋なのに、妹が靴屋の使用人と結婚、あんなに可愛らしい妹なのに…。許せないわ、フランクも…なにもかもよ！

そのときだつた。ドアに何かが叩きつけられ鈍い音が部屋に響き渡つた。マルゴーは驚き椅子から立ち上がつた。ドアを見つめながら後ずさつた。鎖が引きちぎれる激しい音が聞こえた。

恐る恐るマルゴーはドアに近づいていく。そして、ドアに手をかけ、なにか声をかけようと口を開くのだった。

アルトは床に跪き上半身をベッドに投げ出して声を押し殺しながら泣いていたが、少し落ち着いてくると立ち上がり、ヒクッヒクッと喉をならしながら、窓の傍へ歩み寄つた。顔を上げ月を探したがどこにも月は見当たらない。肩を落としため息をついた。まるで月にも見放された気分。窓の下は濃い霧におおわれている。手を窓にあてアルトは不思議そうにその霧を眺めた。

その霧の中には足を引きずるように前進する人影のようなものを見た。人影というよりなにか小さな虫のように思えた。

窓のすぐ下は屋根でおおわれており人影が見えなくなってしまつた。窓に顔を近づけ下を眺めていると、階下で激しくドアを叩く音が聞こえた。

こんな時間にお客さん…？

アルトは窓から手をはなし、ベットに逃げ込んだ。横になつて枕

を引き寄せるとな、姉のマルゴーのことを考えた。きっと姉さんはお客様さんを追い払つわ、姉さんにお客様さんを愛想よく迎えることなんてできない。

アルトは体を起こし、座りなおした。枕を抱きながら考えた。お客様さんの相手をするのは私の仕事だ。姉さんじやムリ、追い返すにしても、お肉を売るにしてもきっとお客様さんは気分を害するわ。アルトは立ち上がったが、枕は抱きしめている。

でも、いまは下に降りたくない！いいわ追い返すなら追い返せばいいのよ。わたしはしらないわ。姉さんが一人で何とかすればいいのよ。姉さんの顔なんて見たくないもの！

アルトはベッドに横になり枕を頭に乗せ、耳を塞いだ。だが今度は激しくドアに何かがぶつかる音が聞こえた。枕で塞いだ耳にもその音が聞こえるほど激しい音だった。

ノックじゃない…。

アルトはベットに起き上ると枕をぎゅっと抱きしめている。心臓が激しく鼓動するのがわかつた。とても恐ろしく感じた。

タムズの部屋の扉が勢いよく開く音が聞こえ、大きな足音が部屋の前を騒がしく通り抜け階段を下りていく。アルトは枕を放り投げて扉にかけよつた。

「ギヤアアアアーッ……」マルゴー恐ろしい金切声が上がる。聞いたこともない悲鳴とともに窓の外が明るくオレンジ色に光つた。振り向き窓を見たが恐ろしくて外を、見る気にはなれなかつた。恐ろしさでただドアを開き父親の後を追うことしかできなかつた。

「マルゴーーー！」タムズの叫び声が聞こえる。

タムズの後を追い階段をいそいで降りていく、階下に降りると扉の向こうに大きなタムズの背中が見えた。霧の中にしゃがみ込み倒れているマルゴーを抱きしめているのがわかつた。何度も名前を呼んでいるがマルゴーの体は石のように動かない。

「姉さん！姉さん！」そう叫びながらタムズに駆け寄つた。タムズの背中に触れ跪つきなんども姉さんと叫んだがマルゴーは動く様子

がない。マルゴーの肩から上は焼けただれ、美しい黒髪はあと方もなく消え、黒い塵のようなものがそこらじゅうに散らばっている。白い煙が肉が焼けるにおいとともにあたりに漂い、髪を焼いた異臭が立ち込めている。

タムズがマルゴーの体をアルトに引き渡し立ち上がった。涙の止まらない瞳をあげてタムズが睨み付けるさきを見た。そこにはある黒い人影があつた虫のような人影はこちらに背中を向けてもそもそも動いている。

月が顔を覗かせあたりをうつすらと照らし出した。

常人の半分ほどの小さな男は鎖の音を響かせて、肩に豚の首をぶらさげた、横顔がちらりと見える、男はアルトとタムズを見つめてうれしそうにクツクツと音を立てて笑っている。

タムズは訳の分からない叫び声をあげながら男に駆け寄っていく。アルトは何度も父親を呼んだがタムズの耳には届かなかつた。

すると男は鉄がはじけるような音を立てて高く飛び上がつたのだ。タムズの頭の上を飛び越えると恐ろしい速さでアルトに向かつて飛びかかるくる、アルトの耳にさらに鉄の音が響いた。

「アルトオオオ！」タムズの泣き叫ぶような声が聞こえた。

男の恐ろしい顔がまじかに迫つていた。男の仮面は鼻も描かれず、細い線で描かれたような目があるだけ。赤い炎のような瞳がちらちらと光つている。仮面の顎の部分は割れて焼けただれた唇が露わになつてている。

割れているのは顎の部分だけではなかつた。仮面を突き破る一本の角、一本はすでに根元から折れているらしかつた。ヒビが蜘蛛の巣状に広がつており、それは角が仮面に施されたものではなく生身の体から生えているものであることを物語つていた。角はゴツゴツしており小さな穴やへこみがある、まるで穴だらけの醜い石のようだつた。

アルトは恐ろしさで身動きできず、ひたすらマルゴーの体に縋りつき顔をうずめた。

男は石畳の道に踵を叩きつけるとさらに高く飛んだ。月に向かつて驚くほど高く飛び上がり遠くの屋根に飛び乗った。太い鎖を月の光の中で撫でながら満足そうな笑みを浮かべた。

男はアルトやタムズには目もくれず闇の中に姿を隠した、屋根を蹴る恐ろしい鉄の音を響かせて……。

3・地下室の宴

暗い階段の入り口に腰ほどの高さの台があり、ランプが一つ置いてある。キッショムはそのランプに火をともした。キッショムの顔が橙色に照らし出されるのをスタンは傍で見つめていた。

階段を下りていくと短い通路がある。そしてその通路を行くとまた階段…。地上から離れていくにしたがって、笑い声や楽器の音が微かに聞こえてくる。それらのたんなる響きはやがてはつきりとした言葉になり、歌になり楽器が奏でる音楽となつて聞こえ始める。

キッショムの目線の先にぼんやりと浮かぶ『デスブース』と書かれた看板、靴型のジョッキに赤いワインがみなみみつがれた絵が描かれている。その下には『おまえの死因はなんだ!』とかかれている。

キッショムはその看板を指先で軽く押した。看板は錆びついた鉄の音をたてて、ギシギシ揺れた。靴のジョッキを照らし出すランプの光がゆれるといわんが波打つように揺れているようだ。

「これはユーモアか?」後ろで不思議そうにスタンが薄ら笑いを浮かべている。

「さあ…」キッショムは看板から目を離すと扉を押して中に入った。キッショムそつけなく返されるとスタンも口を閉じそれに続く。広く大きな部屋は思つたよりも明るい。太陽の光を見ることができないからだろう、死人たちはあるつたけのランプと蠟燭を灯しているのだった。

ここは死人たちが夜な夜な息を吹き返し集まつてくる酒場『デスブース』だ。廃材で作られたようなお粗末なカウンターがあり、酒樽がつまれている。いくつものテーブルがひしめき合つなか天井からブランコがいくつか釣り下がられている。一人乗り、二人乗り…。古ぼけたピアノに、たくさんのガラクタ。酒場といつても廃材置き場のようだ。だがこれが彼らの世界だった。

彼らが行く場所はほかにはない。50人ばかりの死人たちは話をするものはもとより、トランプに興じるもの、歌を歌い楽器を弾くもの、演説かさながらに独り言をいつているもの、くるくるとダンスを踊るもの、足元には小さな子供もいる。隠れたり、走ったり、叫び声をあげたり…、騒がしいことこの上なかつた。しかし、死人たちは騒ぐこと以外することなどなかつたのだ。

入口に近いテーブルに座りちびちびとワインを飲む太つた男が、キッショムとスタンが酒場に入るとすぐに気づき顔を上げた。

「スタン、遅いぞ！なにしてたんだ！？」席を立ち巨体を揺らしながら二人のもとへやつてくる。

「ディブイ…。キッショムを見に行くつていつたろ？」

「ちょっと見てくるつていつたんだ、アレグロの演説が終わるまでに帰つてくるつていつただろ？」ディブイの指差す方向に黒いひげを蓄え胸に手をあて大声で叫んでいる男がいた。

「アレグロは詩人だよ」キッショムがそういうとスタンはその通りだといわんばかりにディブイを見つめうなずく。

「それにだ、まだ演説終わつてないだろ、その…ドラゴンが私に火を噴きどうのこうのつてまだいつてるじやねえか」

「アレグロは同じ話をなんども繰り返してゐるー僕が気付かないと思つたか？ドラゴンにケツの穴を溶接された話は、もう126回目だつ！！」

「数えてたのか…？」

「フフ、僕は馬鹿じゃないからね」

「そこまで馬鹿だとは予想してなかつたんだよ」

「なんだと！スタン、きみは外いでたんだ！！」ディブイがたまりかねてそう叫ぶと、酒場の音楽が止まり死人の青白い顔が一斉に入口の高い台に立つ三人の男を見つめた。

「おいおい、ディブイなにいつてんだよ。出でないよ、出るわけないだろ！」スタンが笑つてそういうと死人たちは耳に入つた言葉をわすれて木製のジョッキを手に取つた。楽器は快活な音を取り戻し、

叫び声が酒場にこだました。

スタンはほつと一息ついたが、三人の死人がスタンの言葉だけでは納得いかないらしく階段のもとへやってきた。

「ほんとだらうな…外にでてないつて」死人が三人、スタンを睨み付けている。スタンは息を飲み、苦笑いを浮かべている。

真ん中の青白い顔をした男はオスカー・ゲイル。リサーチとフォックスという死人を一人従えてスタンリーを睨み付けている。やつれた顔にさらさらの白髪を真ん中でわけている。目は一重で男前だつたがインテリを気取っているようなやさ男だった。

リサーチはスタンより背が高く体も大きかった。いつもゲイルの後ろに立ち人間だらうが、酒樽だらうがとにかく睨み付ける。大きな体だけが自慢の男だ。

フォックスは意地の悪そうな顔もそudsだが性格も悪かつた。いつもやついているが、なにがおかしいのか周りの者にはわからないのだ。とにかくあの黒く汚れた歯と歯並びの悪さが不快だ。ゲイルの後ろに隠れて首だけ出してにやにやしているのだからたまつたものじやない。

「出でないよ、講堂で食い止めた」スタンの肩に手を置き死人の目線を引き受けると、キッチヨムは自分の頬のミニズ腫れを指差して言つた。みると目元も赤くはれて青あざができる。

ゲイルはキッチヨムから目を離し、反応を確かめるようにスタンリーの顔を見た。スタンリーの顎の傷を見つけると鼻を鳴らしにやにや笑つた。

リサーチの腕を軽く叩くとゲイルは満足そうにもといた席にもどつていく。残されたフォックスがニヤニヤ笑いスタンを見ている。「一度死んでみるか…」フォックスの耳元でスタンがそうつぶやくと慌ててゲイルのもとへ逃げて行つた。しかし席に着くと脅されたことを忘れてしまつたかのようににやにやと笑つてこちらをみている。

「チツ…！」スタンが舌打ちをしてフォックスを睨んでいる。

「仕方ないよ、フォックスは頭がいかれてるんだ」ディブイがスタンの肩に手を置いて言った。「きっと後ろから後頭部を鈍器でおもいつきり殴られて死んだんだ、あ…そう、凶器は花瓶かかもしれない…いや、ああ！もしかしたら、死因は虫歯かもしれない。菌で頭がやられたんだ…、ああ…！もしかしたら…」

「…名推理だ」スタンはディブイの言葉をさえぎって「でもこれ以上は事件を複雑にするだけだ。やめたまえ」そういって笑つてキッショムを見る。

キッショムは笑っていた。声は立てなかつたが楽しそうに笑つていた。スタンは胸をなで下ろした。最近は昔ほど笑わなくなり、時々ため息をつく。そして酒場でみなを迎えるのが日課だったのに、デスマストの実験が忙しいのか、遅くれることがよくあつた。

「よし、ワインをいただくか！」スタンはゲイルのことで礼はいわなかつた。いうのが照れ臭かつた。代わりにキッショムの腕を力いっぱい叩いた。

キッショムは少し悲鳴を上げたが笑つていた。ディブイは巨体を揺らしキッショムの背後にまわるとその背中を押しながらいつて笑つた。

「お前の死因はなんだっ…！…ははは！」

地下の宴 2

キッショムの前で木製のジョッキを軽々と持ち上げ、ディブイがワインを喉に流し込んでいる。喉元には分厚い肉がタップタップと揺れている。ジョッキをテーブルに叩きつけると酒臭い息をまき散らす。かなり酒がまわってきていた。

「美味だ！ 美味だよお…でも…でも！ 知つていいかい、キッショム！」

隣で片膝を椅子の上に引き上げてワインと飲みながらスタンはちらりとディブイをみた。キッショムは硬いパンを小さくちぎり口の中へ放り込みジョッキを握った。

「実際のところこのワインは美味だ。でもデスブーツがそう思はせてるんだ。生きてるときに飲んだオルス酒店のワインはこんなものじゃなかつた！ まるで、そう口の中でクルクルと回りながらいい女がダンスを踊つている。まさにそういう感じだ！」

「いまじゃどうなんだ？」あきれでスタンがいふと、ディブイはふと考えるそぶりをみせる。そして立ち上がりつてこういつた。

「うん！ 舌の上で大量のノミが飛び跳ねているんだ！」

キッショムは口に含んだワインをぶちまけた。スタンはそれを見て大笑いしたがディブイはそれ見たかとしたり顔だ。

「ほら、見たことか！ そうだろ？ キッショム」

「ちがうよ、君がへんなこといつからだ…」キッショムは慌てて袖でテーブルを拭いている。

「ああ……」「めんよ」ディブイは巨体を椅子におろすと「ほら、あそこを見て。ソファで飲んだくれてる爺さんだよ」

キッショムとスタンがソファに目を向けるとひときわ大きいジョッキを抱いていびきをかいている老人がいる。壊れたソファに身を

うずめ、鼻から頬が薄く紫色になつてゐる。生きている頃は赤かつたのであるう。

「しつてるよ、あれがオルスだ」スタンがそういうとキッショムも頷いてみせた。

「オルス酒店のもと親方だ」ディブイはそういうと続けていった。「死の間際、町の奴らは親方に死人の免罪符を取らせたんだ。ワインの味を保つためだつた。息子はまだ若かつたからね。オルスは死んでからずっとそのカウンターの傍に立ち毎日テイスティングしてメモを取つた、そして息子にブドウの配合はこつだ、塾生はああだつて手紙を書いたんだ」

「で、どうしてこんなノミが飛び回るような味になるんだ?」スタンは話の腰を折つた。

「まあ、聞けよ、話し終わつてないから……」ディブイは不服を表した目でスタンをみた。「味は日に日によくなつていつた。季節が変わり新しい果実を収穫するころにはまた格段に味がよくなる。みんなテイスティングする親方を囲んでワインのうんちくに耳を傾けた、親方は演説ながらに講義をした。しかし、ある日を境にワインの味は変わらなくなつた。それ以上に味は悪くなる一方だ。一人、また一人と親方のテイスティングに興味を失つていつた……」

キッショムはちらりとソファに深くうずもれるオルスを見た。ただの飲んだくれかと思っていたが、そういう時期もあつたのかと思うと少し哀れだ。ディブイの話はまだ終わつていなかつた。腰をかがめテーブルに上半身を乗り出している。キッショムは机が傾かないように腕をテーブルに乗せ体重をかけた。

「オルスはテイスティングで味が悪くなつていくのが許せなかつた。怒り心頭で手紙を書き、飲んだくれてはジョッキを壊すんだ。オルスがテイスティングする度にジョッキが壊れたんじゃ、みんなたまつたもんじやないだろ?」

スタンはそらそらだとばかりに頷いて見せた。

「…うん、だからみんなでオルスのテイスティングを辞めさせたん

だ。そのかわりあの大きなバケツ……というかジョッキを渡した。その日からあのジョッキでノミのワインをがぶ飲み、カウンターじゃなくあのソファーがオルスの居場所になつた。まるで毎日死んだようになつて、毎日そう、まるで死んでいるかのように、いや、かなり死んでいるかの……。その……

「わかつてゐ、とつくに死んでる。死んでるけど、その、魂も失つたかのようだ」

「そ、そ、そのとおり……！」ディブイは命懸けといったかのよう机を叩くと興奮して立ち上がつた。「スタンの言うとおりだ！」

「まあまあ、いよいよ、座れよ」スタンがディブイの袖をひっぱり椅子に腰を落とさせた「いまのはアレグロが使つた表現を盗んだんだ」「そうか、そうだったのか……」ディブイは尊敬に似たような眼差しを遠くで何やら叫んでいたアレグロに向かへた。そしてキッショムの顔に視線をうつすと「その、つまり、僕が言いたいのは、もっと上手いものが食べたくて……おいしいワインが飲みたい……」そういうとディブイは肩を落とした。

キッショムはデスブーツを見渡した。寄進品を集めるのがキッショムの仕事の一つだ。しかし「寄進品」とは名ばかり、どれもこれもガラクタか、三級品、劣化版だつた。このワインがいい例かもしれない……。

寄進品は町と教会との契約だ。何百年と続いてき経緯がある。この教会は町なしではやつていけないし、町もまた教会なしではやつていけないはずだつた。しかしこの間にか、この教会は、この墓場が……。町の人々のお荷物となつていた。

「わかつてゐ、わかつてゐんだ……ディブイ……」キッショムはそういうとディブイの肩に手を置いた。「……僕が何とかする……」

「おいおい、何とかするつてどうするんだよ？！こればっかりはどうしようもないだろう。ディブイと約束するなら食い物意外にするんだな」

スタンがそう言つたのを耳にかけるよう様子もなくキッショムは立

ち上がった。

「そろそろ部屋に戻るよ…」そういうとキッショムは立ち上がり、椅子に掛けてあつたマントを手に取つた。「デスマストを作らないと…」

「キッショム、金曜日には寄進品を集めに行くんだろう?」「ディブイが子供のような目をキッショムに向けている。期待と好奇心が入り混じつた目付きだ。

「ああ…」キッショムは笑つて見せた。

「そうか、はは」ディブイが嬉しそうに笑つてゐる。

「なんだ? そんなにうまいものが喰いたいのか?」三人が目を向けると、いつから そこにいたのかゲイルがカウンターに持たれてジヨツキを傾けワインを飲んでいる。

「ゲイルだつて喰いたいだらう?」いぶかしげにディブイがそう言うとゲイルがキッショムのもとに近づいてくる。

「まともな寄進品なんてキッショムには無理だ、手に入るわけがないだろ。町の奴らはこいつのことを死人の使いだとか、悪魔の墓守だとか呼んでるんだからな。なあ、キッショム、町の奴とともに話したことあるのか?」キッショムの顔にゲイルの酒臭い息が吹きかかる。キッショムはゲイルから目を離した。事実、キッショムは町の人間とほとんど会話をしたことなどなかつた。恐れられる以上にキッショムは町の人間を恐れているのかもしれない…。

「おまえは町の人間が怖いんだろ?ハハハ。図星か?!
キッショムのマントを握る手に力がこもつた。

スタンは椅子を蹴り上げ立ち上がつた。

「おつと!俺は親切でいつてやつてるんだ。俺を誰か忘れたか?オスカー家のゲイル様だぞ?町一番の権力者だ!いいか、うまいものが喰いたけりや、うまい酒が飲みたけりや、このゲイル様に頼むんだな。頭を下げてお願いすれば…、そうだな、考えてやつてもいい、ハハハハ!」そういうと高笑いをしてゲイルは自分のテーブルへと戻つていく。

スタンが後を追おうとするのをキッショムが腕を握つて引き留めた。

「おい、俺はもう我慢の限界なんだけどな…」スタンが腕を引き払おうとする。

「君もそり思つてたろ!?僕が町の人間を恐れてると…」

「……！」スタンは驚いたようにキッショムを見つめた。しかしその通りだった。「そ、そんなこと…」そう言いかけながらスタンは目線を落とした。

「ほんのことだ…」キッショムはテーブルのジョッキを手に取り「僕は大丈夫だ」そういうつて一人にジョッキを持つように促し、微笑んだ。

スタンはジョッキを手に取つた。デイブイもそれに続いてジョッキを手に取り立ち上がつた。

二人がジョッキを手にしたのを確認すると一ヤリと笑いキッショムは叫んだ。

「死者の胃袋に…！」これは飲み干せの合図だ。

スタンとデイブイは慌てるように「死者の胃袋に！」と声高にいうと一気にジョッキを傾けた。三人の喉元に大量のワインが流れ落ちていく。口元からワインが漏れ落ちていく…。三人はほぼ同時にテーブルにジョッキを叩きつけた。

「じゃあ、デスマストをつくるよ」

「ああ、頼んだぞ！俺たちはお前なじじゃ生きていけないんだから、な！ディブイ！」

「そのとおりさ、僕の体はみんな一倍あるからデスマストもみんなの2倍頼むよ！」

「ああ…考え方…」キッショムはクスリと笑うと一人に背を向けた。

キッショムが階段を駆け上がりしていくのを見届け、椅子に腰かけた。

ディブイはちらりとスタンを盗み見た。なにやら真剣に考え込んでいた。

ディブイはちらりとスタンを盗み見た。なにやら真剣に考え込んでいた。

いる様子で言葉のかけよつがない。かといってカウンターにワインを取りに行くのも妙に気が引ける。

空になつたジョッキの底をただただ覗き込んでいたと後ろから後頭部をひつぱたかれた。

「いて！」

スタンがニヤニヤ笑つてディブイを見ていた。

「なにするんだよー、スタン！」

「お前は余計なことじやべりすぎるのはだよ！」

「ああ…『ごめんよ…』」ディブイが肩を落とすと、ジョッキが田の前に二つ置かれた。

「いいから、はやくワインついで来てくれよ、夜は長いんだ」

「ああ！ そうだね、夜は長い」スタンの機嫌が悪くないと思つとほつとしたようにディブイは笑みを見せ立ち上がり、カウンターへ急いだ。

スタンはほんやりとディブイの巨体を眺めていたが、実のところキッチャムのことで頭がいっぱいだった。

4・バレル・ガードナーの名推理

バレル・ガードナー隊長のブーツがアルトの薄暗い部屋で音を立てている。ゴツゴツと不格好な音がタムズの耳に響いていた。アルトのベットに腰かけ頭を抱えるタムズの前をバレル・ガードナーは小一時間行ったり来たりしているのだ。彼はグレステンの自警団の頭領である。胸を張り、ねじれた赤ひげを顎から耳元まで蓄えている。威儀を装つてはいたが傲慢さがにじみ出ている。質の悪い葉巻を口にくわえてもうもうと煙を出していいる。

「正直に言おう、タムズ」口元の葉巻を指に挟むと手に取った。口に残った煙を舌で押し出すと唇を舐める。葉巻の先の火種を眺めながら続けた「私はさきほどからおまえの言つてていることがまつたくもつて信じらんのだ」

タムズは顔を上げた。涙を枯らした目は腫れぼつたく力がない、まるまると太っていたタムズの顔はほんの数時間でげつそりとし、顔色が悪く白くなっていた。

「君は悪魔を見たといつたな…。いると思うか？ 悪魔が…。じつはわたしは神さえも疑つてゐる。このケルビム・サムに誓おうじやないか、断じて悪魔などおらん」バレル・ガードナーは膝に届くほど長いベストをめぐり腰の拳銃に手をあてた。バレルの腰の拳銃は黒い犬の装飾が施してあり、犬の口から銃口が飛び出している。

「わたしはケルビム・サムで仕留めることができる存在しか認めん。そしてこの部屋に来てわたしが正しいことを悟つたのだ」

タムズは疲れた目を無理やり上げてバレル・ガードナーを見つめた。

小一時間前、タムズの部屋で話をしていたガードナーはタムズの話を聞き終わると、アルトの部屋はどこだと言い出した。そして二人はアルトの部屋にやつてきたのだ。そしてガードナーはベッドに腰掛けるタムズの前を赤ひげをなぜながら行つたり来たり…。そして

葉巻をつけたのだった。

「私の半分くらいの背丈で背筋の曲がった黒マントの男…、鉄の音を響かせ鳥のように空を飛び一軒先の屋根に飛び乗る。そしてそいつは角を生やしている。……まさに悪魔だ。そうだったな」タムズは力なくうなずいた。

「タムズ、ここから通りが見えるな。ちょうどこの張り出した屋根の下が店のドアだろう?」ガードナーが窓の下をのぞき見ると町の人間がランプをもち集まつてきている。自警団の団員が持つ松明が炎をあげてあたりを明るく照らし出し、集まる人々の顔を浮き上がらせている。ガードナーが窓から見下ろしていることに誰一人気付いているものはいなかつた…。そう、あのスプリング・ヒールド・ジャックを覗いてはだ…。

タムズの肉屋からそう遠くはない屋根の上に大きな煙突があつた。煙突は月を背にして大きな暗い影を屋根に落としていた。その影の中にじつとスプリング・ヒールド・ジャックは潜んでいた。

彼が見ている世界は赤い幕で覆われている。ゆらゆら陽炎のように揺れ色を失っていた。黒は強烈な赤に反転し、白いものはうつすらと赤いだけだ。それは彼の目玉が炎でできているからだった。炎が燃え盛る音が耳鳴りのように鼓膜に響いている。昼間になれば日の光は彼の世界をただの白銀へと変えてしまうだろう。

タムズの店を遠くから眺めながら、町の人間の顔を見る。みんな赤く光る瞳をしている。窓の傍で男がなにか口を動かし言葉を発しているのが見える。

なぜそこにいるのか、スプリング・ヒールド・ジャックにもわからぬでいた。ただ胸にうずくなにかがここにいるよう彼に命じたのだ。彼はまだ胸にうずく何かしらを抑えじっと我慢をしていた。

「アルトはこの部屋に一人だつた…」ガードナーはそう言った。独

り言が、それともタムズに答えを促しているのか。タムズは何も言わずガードナーから視線を外し暗い床を見つめている。

「この窓から油を撒けば町の奴らは焼け死ぬだろうな……」

タムズは驚いたように視線をガードナーに向かえた。

「この窓から外に出て、油を撒き火をつける。もしくは火のついた油をぶちまけるか……まあ、どちらにしても簡単なことだ」

「ああ、あなたはなんて恐ろしいことを……」タムズの手がきつく握りしめられた。ガードナーは構わず話を続ける。

「アルトが近々結婚するというような噂があるな、しかしだ、わたしはあのマゴニーが許すとは思えん。アルトの母親がわり、いままではこの店の女主人といつてもいい。アルトほどのかわいい女性ならば他に良い縁談があるのに、靴屋の使用人とはな……。まあ、ただの噂だ」

「マルゴーに式の話をした……マルゴーは頷いて見せたんだ！式を挙げることを承諾したんだ！お前に何がわかる！」タムズはたちあがり声を荒げた。

「おつと、そう大声をだすな……。マルゴーが生きていればその口から聞かせてもらおうじやないか」そういうヒドアを見るとばかりに顎を動かす。

そこにはウイリアム・ブロディー医師が立ち尽くしていた。丸い眼鏡をかけ高い鼻、優しく聰明な男で微笑みを絶やさない男だ。だがこのときはばかりは暗い顔をしていた。丈の長い薄手のコートを着ている。大きな黒い革の医療用バッグを手に持ちタムズが大声を上げてているのを目を丸くしてみていた。

タムズはブロディー医師に駆け寄ると両手で彼の肩をにぎりしめた。喉から言葉を吐き出させるように激しくブロディー医師の体を揺らした。

「マゴニーは、マゴニーは無事なのかー？」

「ええ、命はなんとか……強く肩を握るタムズの腕にブロディー医師はやさしく手を置いた「……ですが、顔のほうは……わたしにはどう

「…も、もどらないのか…」わかつてたことだつた、タムズは焼けただれる娘の顔をこの目で見ていたのだ、唇は見当たらず、奥歯が一部はみ出していた。いたるところ血がにじみ出ており、肉から皮がはがれ落ちていた…。

タムズはプロディー医師の前に跪き、嗚咽を上げ始めた。
プロディー医師は部屋に入りながら、襟元のボタンを外し首筋を軽くした。ため息についてベットに腰を下ろした。

「タムズさん、少々残酷だが、聞いてほしい…」そういうとタムズの背中を見つめ話を続けた。「彼女の唇は、上唇も下唇もわからないほどだつた…からうじてメスを入れたが…喉も焼けている。正直、言葉を離せるか…話せても今までのようにはいかないだらう…」プロディー医師は大きく呼吸をして背筋を伸ばした。「目は、もう見えない…」

タムズが床に頭をぶつけ泣き叫ぶ声が響きわつ立つた。町の人も階下にいた自警団も2階に目を向けずにいられないほどの叫び声だ。
プロディー医師は立ち上がり、タムズの背中に歩み寄り膝をついた。そして肩に手を置いた。

「タムズさん、そのように大きな声を出してはいけません…。マルゴーはまだ気を失つています。…眠っているんですよ。あなたが気をしつかり持ち、マルゴーとアルトを支えなければ…」

タムズは唇を閉じ嗚咽を押し殺した。喉の筋肉が顎の骨をきつくしめつける。目をきつく閉じ、あふれ出る涙を力づくで押さえつけようとした。

「…この町の中でも稀にみる美しい女だつたんだがな…。」ガードナーがそつといと、タムズはブローディー医師の腕を振り払いたちあがつた。ガードナーに駆け寄り襟元を掴むと窓の備え付けられた壁に背中ごと後頭部を叩きつけた。

「お前に…お前になにがわかる!!」

ガードナーは後頭部の痛みに顔をゆがめていた。

「…も、もどらないのか…」

ブローディー医師は立ち上がり、タムズとガードナーに駆け寄る
「タムズさん、落ち着いて！」タムズの腕をきつく掴むとガードナ
ーを睨み付けた。「あなたも口がすぎますよーー！」

「ああ…」そうこうと両腕でタムズの力を失った手を振りほどいた。
タムズは床に崩れ落ちた。

「…すまなかつたな、口が過ぎた」

そう口にするガードナーの耳に馬のひづめの音…馬は店の前でとま
り鼻を鳴らしている。ガードナーはちらりと外を見た。馬上から飛
び降り地に足をつけた若者は肩まで伸ばした美しいブロンドの髪を
もっている。

「おっと…グレスデンの王子様のお出ましだぞ…」ガードナーは軽
く舌打ちをした。

「ブローディー…」ガードナーはブローディー医師を見た。ブローディー
医師が頷きタムズに寄り添うのを確かめると靴音を響かせて階下へ
向かうのだった。

5・グレステンのおどき話

狭い廊下の先に階下へ降りる階段の降り口があつた。その傍に自警団の若者が一人たつている。自警団おそろいのチョッキを着て、白く硬い帽子を被っている。ガードナーが廊下に姿を見せると背筋を伸ばした。

「いかがでした…？」ガードナーが階段に近づいてくると男は興味深げに聞いた。

「カール…」カールと呼ばれた男は細身の男で、気の弱い臆病な男だつたが、ガードナーのそばにいるときは胸を張り偉そうにしている男だ。帽子に一人だけ黒いカラスの羽をつけ自警団副隊長を自負している。

「…アルトは？」

「ええ、下にいます。ほら…」

ガードナーは階段の降り口までやつてくると階下を見た。アルトは階段の一番下に腰かけ縮こまっている。タムズの叫び声が聞こえすっかり怯えてしまつたのだろう。両手で硬く耳を抑え振るえており、泣いていることは容易に想像できた。

カールはガードナーの目を見つめ答えをじつと待つている。

「いまにわかる…」そういうとガードナーはカールの肩に手を置き引き寄せ、耳元に口を近づけた「いいか、アルトから口を離すんじゃないぞ…」

カールはキヨトンとしていたが、慌てて背筋を伸ばすと敬礼をした。

「わ、わかりました！」

「うむ。」ガードナーは頷くと階下へ降りていく。カールも慌ててガードナーに続いた。

しゃがみ込むアルトの体を避けてガードナーは床に足をつけた。アルトに一警くれると入口へ向かう。扉は開け放たれており外に馬

の首筋を撫でている金髪の男を見つけた。男はロウガン・ハン・オスカー。この町の長、モンスリー・ハン・オスカーの一人息子。そしてご存じ、死人ゲイルの甥である。おそらくゲイルが死んだのはこのくらいの年ごろなのだろう。長い睫に、深い二重の瞼。ゲイルの血がその体に流れているのがそれとわかる顔立ちをしている。

ロウガンはガードナーを見ると自警団の一人に手綱を握らせ、招いてもいよいよ堂々と入ってきた。そしてガードナーと言葉を交わす前にうずくまっているアルトを見つけ駆け寄った。ガードナーは出かけた言葉を飲み込んだ。ロウガンはアルトの前に跪き肩に手を置き呼びかけた。

「アルト！ アルト！ 大丈夫か？！」

ロウガンが声を発すると耳を塞いだ手にさらに力を込め、アルトはひたすら頭を振るのみだった。

「かわいそうに…」そういうと立ち上がり、ガードナーのもとへやつてくる。さりげなく手を差し出し握手をもとめてきた。ガードナーは思わず手をにぎる。「この男お得意のパファーマンスか…ガードナーは思った。

「うん…、たいへんなことになつたな…」満足げに頷くと、ローガンは後片付けが放り出された店の中を見渡した。肉も皿も全部放り出されたままだった。気の桶が足元に転がっている。肉の周りをいつぴきのハエが飛んでいる。ガードナーを従えローガンは胸をはり腰に手を置いている、店の中を見渡す姿はまるで自分が主役だといわんばかりだ。

「ええ、ミスター・ローガン…」ガードナーは仕方なくその芝居にしたがつた。

「すみません！ 通してください！！」

ローガンとガードナーは野次馬に首をむけた。人込みはどうやらその数をどんどん増やしてくるらしかった。人込みが波のように揺れている。声を上げるもののが誰か悟るやいなや人込みは慌てて道を作

つた。

やわらかい黒髪を短く切っている頭が人込みをかき分けていた。開いた道にその姿を現すやいなや店の中に駆け込んでくる。

「アルト！！」

ハンソン・フランクだった。

ガードナーがそれがフランクだと気づいた時にはすでにアルトに駆け寄り抱きしめていた。

「アルト！ アルト！」

アルトはかたくなに耳を抑えている。フランクはその手を握りなんども叫んでいる。

「アルト！ 僕だ！ どうしたんだ！ ？ なにがあった！ ？」

アルトはゆっくりと顔をあげる、目の前の男を乱れた髪の隙間から覗き見る。頑なに耳を抑えていた手が激しく震えている。

「ああ……」アルトは手を伸ばす、しかし手の震えはさらに大きくなるいつぽうだ。泣きはらした瞳からさらに大粒の涙があふれ出した。たまりかねたようにフランクに抱きつくとアルトは大声を上げて泣き出した。

フランクはアルトをきつく抱きしめ「大丈夫、僕がそばにいるだろ？ 大丈夫だから…」 そういうながら頭を撫で、乱れた髪をなおしている。

「さあ… こんなところに座り込んでちゃダメだ…」 そういうとフランクはゆっくりとアルトを立たせた。アルトもそれに従うのだがフランクの胸に顔をうずめている。離れることはできなかつた。やさしくアルトの体を抱き寄せながらテーブルの傍に寄り、椅子を引き寄せ座らせた。

自警団の一人が氣を利かせて肉を載せた盆を持ち店の奥に姿をけした。

アルトはフランクに体を預け顔を両手で覆い泣いていた。

「フランク、わたしが、わたしがいけなかつたの…」 アルトはそういうとフランクの二の腕を強く掴んだ。

「な、なにを言つてゐるんだ、君のせいなんかじゃない。悪いのはマルゴーにひどいことをしたやつだろ？君がなにをしたというんだ？」
「何もしなかつたの！お客さんが来たと思ったわ。私知つていたのよ、誰かがドアを叩いたのを…でも私、知らないふりをしたわ。お客様さんの相手は私の仕事なのに…わたし…姉さんの顔なんて…顔なんて…」見たくない…！そう思つた。だがそのことを口にすることができなかつた。姉の焼けただれた顔が脳裏を横切る…。アルトはまた大声を出して泣き出してしまつた。

ローガンはガードナーの背中を押し、外に出ようと促した。
入口に立つた二人は松明の光をその体にうけている。まるでガードナーは舞台上に上げられた氣分だつた。

「マルゴーは…、大丈夫なのか？」マルゴーのことを思いやつて聞いてゐるのだろうか…？ガードナーは興味の目を向ける野次馬の視線を感じた。

「ええ、命に別状はないと…」ガードナーは言はずらうとうつむいた。

「そうか、それはよかつた。安心したよ」ローガンは笑みを見せた。「美しい女性だからな、なに、今回のこととは少しヤケドを負つたようなものだな」

ガードナーは違和感を感じた。あまりにローガンが楽観的だつたからだ。彼は馬鹿ではない。念には念をいれる。何事も慎重をきする男ではなかつたか…。

しかし、安心したのか野次馬の中には笑みを浮かべるものもいた。

「いえ…」

「ん？…どうした？」ローガンの目が話をしろとガードナーに訴えかけている。

「顔を焼かれてしまつたんですよ、生きているのも不思議なくらいです…」

それを聞いたローガンは言葉を失つた。野次馬もまた同じだつた。

ローガンは手で顎を撫ぜた。

「…悪魔…悪魔の仕業らしいな…」怒りにみちた低い声だ。だがその声は集まつた野次馬たちの耳に届くのに十分だった。

なにを馬鹿な…。そう思つたがローガンの顔を見てその考えを捨てるべきだと思った。バレル・ガードナーの性根は腐っていたのだ。そして彼の腐った性根が彼にそう思わせていた。

「ええ…」ガードナーは無意識にそう答えていた。

野次馬たちはいちおうにざわついた。悪魔だなんて…。こわいわ…。そういう声がそこかしこから聞こえてくる。

「われわれのおどぎ話が現実になつたわけだ…」野次馬のざわつきがさらに激しくなつた。

ローガンは野次馬を見渡した。野次馬は目に恐怖の色を浮かべてローガンを見ていた。この瞬間、野次馬は聴衆へと変貌していた。

「わたしたちは幼い頃から恐ろしいおどぎ話を聞かされてきた…」聴衆の中の一人の男がその通りといわんばかりに頷くのを確認するとローガンは軽く頷いてみせた。

「うん…なにか悪いことをすれば、夜布団に入るのをいやがれば、やつはやつてくると聞かされた…われわれの目を焼き、胴体からこの首を切り離すために…」ローガンはまるで聴衆を脅すかのように声を荒げ、怯える顔を見渡した。「終わらせるんだ…」低い声が聴衆の胸に響く。聴衆は息を飲んだ。

「終わらせるんだ…」おどぎ話を…」

バレル・ガードナーはローガンの言つことの意味が分からぬいでいた。いやわかりたいとも思わなかつた。しかし、ガードナーはいぶかしげに眼を細めると、聞かずにはいられなかつた。

「終わらせるとは…、その…？」

「墓守だ…」

聴衆はざわついた。『ハカモリ…』といつ囁く声ががそこかしこから聞こえてくる。

「墓守を…地獄へ送りかえすんだよ」

ガードナーは驚いたようにローガンを見た。そんなことをしてなんになるのだ？そう言おうとした。しかしその言葉を飲み込んだ。いや、彼の腐った性根がガードナーに言葉を飲み込ませたというべきである。オスカー家の跡取りに意見して得なことなどあるだろうか……？

「われわれの手で恐怖のグレスデンのおどぎ話を終わらせ、子供たちに勇氣と安息を与えるおどぎ話を聞かせてやるうじやないか……！」ローガンは足を踏み出した。まるで舞台にたち聴衆をあおるようには拳をかかげ歩きながら叫んでいる。聴衆の目はローガンにくぎ付けになり、首がローガンの姿を追っている。

「ここに誓おう、わたしローガン・ハン・オスカーとそこにいるバレル・ガードナーは必ずや墓守を地獄へ送りかえしてやる……！」

「……！」指を差され突然やり玉にあがつた自分の名前にガードナーは驚き、あやつく声をあげそうになつた。しかし聴衆の驚きと期待の入り混じつた瞳の輝きに居住まいを正す以外に道はなかつた。「ほかに、わたしたちに手を貸してくれるものはいるか！？」聴衆に問うローガンの声は力強かつたがすぐに手を上げようといつものは出でこない。顔を見合わせお互い牽制している。手を上げようとする男の肘を掴み首を振る女性もいる。

ローガンは鋭い眼光を聴衆に向ける。聴衆は首を縮めて押し黙っている。ローガンの目がドアの近くにたたずむ自警団副隊長のカールを見た。カールは目を丸くして背筋を伸ばし、おそるおそる手を上げた。

ローガンはカールの手を取り手を力強く握った。「君は勇氣があるな」そういうと賞賛の微笑みをカールに向けた。

カールは胸を張つてうなずいた。まるで重大な任務を請け負つたかのように緊張が背中を走つた。

カールの握つた手を離すとさらに聴衆に目を向け、口を開こうとしたその時だつた。

「わたしがお手伝いします！」

ドアの中からハンソン・フランクが歩み出てきた。怒りに満ちた目をしている。思いつめたような表情には硬い決心がにじみ出ている。

「わたしにも、手伝わせてください……」そうこうとフランクは聴衆の前に立った。

聴衆の目がフランクにくぎ付けになる。ガードナーはその緊張感の中、不敵な笑みを浮かべる人間を見た。ほかならぬローガン・ハン・オスカーだ。

役者がそろつた。ガードナーはそう思った。以前町にやつてきた旅芸人の芝居で同じ感覚を覚えたことがある。芝居の中でこそという時に出でてくる登場人物。その人物が出てくるときの観衆の気持ち。否応なく物語に引き込まれる観衆。あとは幕が下りるまで彼らは芝居の虜となる……。

しかし、ローガンは不敵な笑みをかき消しこういった。

「きみが？ フランク、君はアルトのそばについていてあげなければ……」

「いえ、僕も手伝います。アルトは僕の恋人だ……僕にとつてマルゴーは家族も当然……どうしても許せないんだ……」そういうと店の中で肩を落とすアルトをちらりと見た。「僕は彼女を守りたい……傍にいたい……でも、もしも戦うことで彼女を守る道があるなら、僕は迷わない……、戦います」

聴衆から鼻を鳴らす音が聞こえた。女が顔を隠し涙を拭いていた。誰もが声を上げずただその場に立ち尽くしている。

「ああ……！」そのなかローガンが声を上げた。「まさにわたしもガードナーも同じ気持ちなんだ！！君は家族を！わたしたちはこの町を！！命をかけて守ろうじゃないか！！！」

ローガンはフランクのもとに歩み寄りフランクを強く抱きしめた。そして、一人また一人と手を上げていく……。もう彼らの肘をひっぱり引き留めるものはいなかった。町の人間は虜となっていた。ローガンはまんまと観衆を舞台に引き上げたわけだ。

民衆とは愚かなものだ…。ガードナーは心の幕を引き下ろした。もつ口ーガンの民衆を煽る声も、騒ぎ立てる野次馬の声もどこか遠くから聞こえてくる雑音のようだつた。ただ月の周りに浮かぶ黒雲が風に流されていくのをぼんやりと見ていた…。

もしも、バ렐・ガードナーの意識に考える力が残つていれば、遠い屋根の上、煙突のすぐ真下に一つの赤い光を見つけ、それがなんであるか確かめようとしたのであつた。蠟燭の光よりも赤く輝くその光を視野にとらえながら、バ렐・ガードナーはそれを見逃していたのである…。

6・白い霧の中で・ガードナーの家路・

6・白い霧の中で・ガードナーの家路・

辺りに深い霧が漂い始めた。煙突の陰に隠れているスプリング・ヒールド・ジャックは町の人々が去っていくのをじっとみていた。彼らが姿を消したあと、いくつかの通りの角から白い霧がスプリング・ヒールド・ジャックのもとへ流れてくる。夜はもとの静けさを取り戻す。彼の呼吸は荒くなり始めていた。

自警団隊長バレル・ガードナーは家路の途中であった。ほんの一時前から足元に深い霧がまとわりついてきた。突然霧が発生するのはこの夜で2度目だつた。いまや彼の後についているのは、副隊長のカール一人である。

「不気味ですね…」カールは霧を蹴り上げながらガードナーに話しかけた。霧が吹きあがり、渦を巻いている。

ガードナーはいぶかしげにカールを見た。

「どうか…？ただの霧だ」

「そう、そうですね…」自分が臆病風に吹かれているものとガードナーに思われたくはなかつた。彼は腰のサーべルを抜いた。月の光が反射した。「私は明日このサーべルを鍛冶屋に持つていき、手入れをするつもりです。墓守を地獄へ送りかえしてやる…！」そういうと足元に揺れる霧に切りつけた。空を睨み付け奇声を上げてサーべルを振り回した。

「お前は俺の言つたことを覚えてないのか？」ガードナーがそういうとカールはサーべルを構えながら キヨトンとした目をガードナーオに向かってた。

「と、いいますと…」

「まずは、その物騒なものを腰におさめるんだな…」

「ああ……」カールは慌ててサーべルを鞘に戻した。

「いいか、俺はアルトから目を離すなといったんだ…」

「はあ…、そうでした。しかし、墓守は…」

「お前が町の奴らの茶番に付き合つ必要はない」

「はっ！」そういうわれてカールは胸を張つた。自分は町の人間とは違う特別な存在だといわれてるような気がした。

「お前は墓守のことはどう思つている？」カールはガードナーの横顔を見た。何か考えているのがわかる。なんだか遠くを見ているのだ。

「はあ…悪魔…」そういうにかけてカールは言葉を飲み込んだ。悪魔はおそらくケルビム・サムでは打ち殺せないであろうからだ。「実のところ彼らは…犯罪者です。凶悪な…」

「そのとおりだ」

カールはほつと胸をなで下ろし、言葉をつづけた。

「あるものは海賊の頭領だったと聞きます。ケルト海を死体で埋め尽くし陸を作つた。そしてあるものは金で人殺しをする暗殺者だったと聞きます。老若男女、彼はチエスをするように人殺しを楽しんだと…、そして今の墓守は人肉を食し、血をワインのように飲んだと聞きます…」

「そうだ、その通りだ…。しかし、人肉を食し、血をワインのように飲んだという男は、先代の墓守だ…」

エギオン…。その名前を口にしかけたが、ガードナーはやめておいた。エギオン、その名前は忘れようとしても忘れる」とはできない名前だ…。

暗い町の路地をまだ若いバレル・ガードナーが息を切らせて走っていた。モジヤモジヤの髭はまだその頬ではなく、赤毛は白い帽子で隠されていた。当時、彼は副隊長だった。いまのカールと同じように白い帽子にカラスの羽をつけていた。そして腰にはケルビム・サム。年老いた隊長が若くたくましい彼に託したものだった。若い

ガードナーは誇らしかつた。毎日ケルビム・サムで悪人を仕留める自分を想像して楽しんでいた。

彼はコソ泥を追つていた。痩せこけた男はパンを握りしめ路地を右に曲がり、左に曲がり逃げ道を必死で探している。しかし路地裏は彼の前に高い壁を置いたのだ。行き止まりだつた。

ガードナーは足を止めた。ケルビム・サムの導火線に火がついていた。ガードナーの胸が高鳴つた。ケルビム・サムに火をつけたのはこれが初めてだつた。銃口をコソ泥に向ける。

「パ、パンを盗んだだけだろ…」男はまだ若い男だ、少年のようにも見える。

「それはなんだ?」ガードナーは男のもう一方の手を顎で示した。

「これは…肉だ。パンと肉を盗んだんだ…」

「りっぱな泥棒だぞ。あと5秒ほどだ…ほかに言い残すことはないか?」

ガードナーはこの時をどれほど待ち望んだことか、いまや導火線は火薬に火をつけようとしていた。

「僕は! 僕は…」慌てて男は口を開いた。

その時だ、ケルビム・サムが口から火を噴いた。凄まじい音が路地に響き渡り、ガードナーの腕がはじけ飛んだ。ガードナーが宣告した時間よりも2秒ほど早かつた。

男は下つ腹に風穴を開け吹き飛んだ。行き止まりの壁に体をぶつけると壁にずるずると背中を擦り付け倒れ込んだ。風穴から白い煙が立ち上っている。

ガードナーはケルビム・サムに触れ銃口に施された犬の装飾を興奮した目で見つめた。ケルビム・サムに触ると熱を帯びている。あたりに硝煙のにおいが立ち込めている。叫び声をあげたいという衝動を必死に抑えながら、くつくつと肩で笑つた。

「僕は…僕はソルマントの死人なんだ…」

男の声が聞こえた。振り向くと男はいつの間にか立ち上がつている。胸に空いた風穴に指を突つ込んだり撫でてみたり、不思議そ

に眺めている。白く立ち上る煙を両手で振り払う。

「僕はソルマントの死人なんだ…」男はそういうと慌てて道に落ちているパンと肉を拾い上げた。「これ、返すよ…悪気はなかつたんだ…」そういうとガードナーの足元から少し離れたところにパンと肉を並べておいた。「もう、帰らないと…墓守にみつかつたらきっとひどい目に合わされる…」

ガードナーは怒りに震えた。まだ熱いケルビム・サムを握りしめ、いいようのない怒りに震えている。それでいて何も言葉が出ない。死人はガードナーがなにも言わず、怒りに震えているのを見ると反応を見るように笑つた。しかし笑みは帰つてこない。男は肩を落とすと「ごめんよ、脅かすつもりはなかつたんだ。ただ、外にでたかつたんだよ」そういうと駆け出そうとした。

しかしその瞬間、男は後ろに体をのけぞらし吹き飛んだ。男は細く長い悪魔のような腕に後ろの襟首を掴まれ引き戻されたのだ。ガードナーが見たものは黒く長い鉄の棒。先が三つ又に分かれグニヤリと曲がっている、まるで悪魔の手首がついているようだつた。吹き飛んだ死人を黒く大きな影がしつかりと受け止めた。

「エ、エギオン…！」

背中の黒い影を首をねじり見上げて男は声を上げた。エギオン：たしかにそう言つた。いつの間にそこに立つたのか、ガードナーは全く気付かなかつた。ガードナーは影を睨みつけたが心の中は恐怖に支配され、言葉を発することができない。黒く大きなマントをはおり、フードを被つたの男の顔はよく見えない。ただ顔に大きな傷があるのがちらりと見えた。

「度が過ぎるな…クロード」

「『ごめんよ…。ただ外に出たかったんだ。うまいものを食いたかったんだよ』男はそういうと道に置かれたパンと肉を指差した。黒い男が深いため息をついたのがガードナーにはわかつた。

「すまなかつたな…。驚かせたか…」男の声は意外にも優しい響きを伴つていた。軽々と死人をわきに抱えると「その、黙つていなくて

れるか？このことをだれにも話さないでほしい…」

ガードナーはただ頷いた。いやだとは言えなかつた。黒い影から感じられる威圧感がガードナーから言葉を奪つていたのだ。

「そうか…」男の口元に笑みが浮かぶのがちらりと見えた。ぶらりと力なくうなだれていた死人が顔を上げガードナーに笑みを向けた。ガードナーと目が合うと嬉しそうに手を振つて見せた。

大きな影が体を動かすと、ガードナーは後ずさつたが、とつさに手を上げ影に向かつて指をさした。

「いいか！だ、黙つててやる！」大きな声を出したが、指先から腕にかけて激しく恐怖で震えている。その声を聴いて男は固まつたが、ガードナーはかまわず続けた。「その代り、二度と！一度と死人を外へ出すんじゃない、一歩たりともこの町に近づけるな！！」それがガードナーの精いっぱいだった。そういうながらいつ腰を抜かすかと不安で仕方なかつた。

フードが動き、男の顔が露わになつた。顔に大きな傷のある男だ。しかし、ガードナーを見つめる目はどこか悲しげだった。

「わかつた…約束しよう…」そういうと男は地面を強く蹴り飛び上がつた。壁を蹴つて屋根を掴むとひらり体を反転させて屋根の上に飛び乗つた。死人をわきに抱えて軽々と屋根に飛び乗つたのだ。ガードナーはその機敏な動きに目を奪われた。

男が姿を消すとケルビム・サムを見つめた。腹の底から怒りが湧きあがる。

「わたしは絶対に認めない…。ケルビム・サムで仕留めることができないものなど…」

ガードナーが腰に収めているケルビム・サムを握りながら何か考えているのをカールは不思議そうに眺めている。

「あの、墓守がどうかしたんですか？」

ガードナーは我に返つた。カールの顔を見ると再び歩きながら話を始めた。

「彼らはその罪を償うために生涯を死人にさげた者たちだ。決して許されぬ罪だ…決してな…。だが、今の墓守は少し事情が違う。

お前も噂くらいは聞いているだろ?」

「ええ、もちろん。その…孤児で、幼いころから教会にいたという」とくらいいは…」

「なにか罪を犯したのか?」

「はあ…、小さいころから町に姿を現してはよくものを盗んだりと…。それくらいですかね…」

「そんなところだな…」

ガードナーの言葉を聞きカールはほつと胸をなで下ろした。

「われわれは自警団だ、町を守らねばならん。そして誰よりも現実的でなければならん。噂以上に大事なものは、自らの勘と思考だ。わかつたな?」

カールは目から鱗の思いだつた。この瞬間自分はまた一つ賢くなつたのである。そしてカールは歩みを止めた。

「わたしはこれから行くところがありますので!」

ガードナーは足を止め振り向くと、笑みを浮かべカールを見た。カールは敬礼をすると足早にもと来た道を戻つていった。

墓守か…。不意にエギオンの悲しげな瞳が頭をよぎつた。それだけではない、今まで見たことのない記憶、忘れていたのだろうか…。グロード…死人だ。やつは屋根の上に運ばれようとするときもガードナーを見つめていた。悲しそうな瞳に涙をためて、さみしげな表情が記憶の中でクローズアップされた…。

ガードナーは笑つた。死人に涙など…。そうつぶやくと記憶を消し去るよつに頭を振り、また歩きはじめた。

6・白い霧の中で・鉄の爪・

長く伸びる煙突の影の中に姿を隠していたスプリング・ヒールド・ジャックは月の光のもとへ歩み出る。通りは揺れる霧が漂い流れ川のようである。屋根を踵で踏みつけると一足どびにタムズの家の窓の下へ飛んできた。壁に両手をつけてまるで蛙のように張り付いている。

突き出た屋根の上を音もなく動きながら窓のそばにむづつてくると中を覗き見る。アルトの部屋だった。

アルトの部屋には誰もおらず。乱れたベッドがあり、窓のすぐそばにテーブルがあつた。ドアが開け放たれており薄暗い廊下が見える。スプリング・ヒールド・ジャックの赤い視野にもそれがしつかりと見てとれる。

廊下が微かに色を変えた。ランプのほの暗い明かりが近づいてきていた。スプリング・ヒールド・ジャックは一度身を隠すとこんどは慎重に中を覗き込む。ランプを持った女がドアの前でふと足を止めた。スプリング・ヒールド・ジャックはその身を引いた。ドアが閉じる音が聞こえた……。

それと同時に先をたてるとドアの前を通り過ぎる。片手で体を支えながらも素早い動きだ。壁づたいに進む。隣家とタムズの家の暗い隙間に潜り込んだ。そこにも一つ窓があつた。真っ暗な部屋だつた。スプリング・ヒールド・ジャックの炎の瞳には女がベッドの上で眠っているのが見えた。スプリング・ヒールド・ジャックは息を荒くした。そして窓に触れようとした時だ。ランプを持った女が扉を開いた。スプリング・ヒールド・ジャックは壁に背をつけ、息を殺した。

部屋に入ったアルトはマルゴーを見た。寝息が聞こえてこない、ほんとうに眠っているのだろうか……。ランプをテーブルに置くとベ

ットの傍の椅子に腰かける。あるいはマルゴーの胸に手をあててみた。たしかに胸が上下して呼吸している。胸から手を離すと口元を抑え、嗚咽が漏れるのを防ぐ。目から涙があふれ出していた。涙はどうしても止めることができなかつた。

マルゴーの顔は包帯で隠されて全く見えなかつた。美しい艶を放つていた鼻筋がいまは異様に低くなつていた。口元にかすかに隙間がありそこから息をしているようだつた。包帯は赤い血が全体にじみ出ており、ところどころ乾いて黒く変色している。

ふとアルトは目を上げた、そこにタムズが立つていた。タムズは黙つてアルトのもとへ歩み寄る。タムズの体に顔をうずめ肩を揺らしてアルトは泣き始めた。

スプリング・ヒールド・ジャックはドアの傍で喉を搔きむしりくぐもつた低い声を出し始めた。喉が苦しいのだ。頭を抱え天を仰いだ。口から白い煙が立ち上り始めていた。まるで逃げるように暗い路地へと姿を消した。

スカートを激しく揺らし女は家路を急いでいた。広い通りに漂う霧を足で蹴るように歩を進めた。夫が夜遅く出て行つたことをいいことに、子供を急いで寝かしつけると自分は男の家へとしけこんだのだ。若い男はいつになく彼女を引き留めた。まさかこんなに遅くなるなんて思つてもいなかつた。楽しい時間はすぐに過ぎ去るものなのだ。

大変なことが起こつたと夫はいつていた。夫は自分の仕事の傍ら町の自警団をしていた。大変なこと…。もしかしたら、夫は朝まで帰つてこないかもしない…。女はそう期待しつつも必死に言い訳を考えていた。

しかし、そんなことを考える必要はなかつた。女の耳にはあの鉄の音が響き始めていたのだから。

スプリング・ヒールド・ジャックは屋根を捨てると女の前に降り立ち行く手を阻んだ。女に背を向け地面にかがみこんでいる男が手元で何かいじくっている。鉄の音…女は地面にかがみこんでいるその男が大きな知恵の輪で遊んでいるように見えた。男が小さくなにか言つてるのが聞こえた「アイアン……アイアン…」

「アイ…アン…? 声をかけようにも言葉が思い浮かばない。小さな男だ。子供のいたずらだろうか…」

男がその顔を上げた瞬間、女の背筋が凍つた。男の顔はこの世の者の顔ではなかつた、醜い角が生えていた。赤く光る瞳…。男はまるで女に玩具を見せるようにその手を見せた。指先には鉄の爪がついていた。いたるところ欠けておりまるでのこぎりの刃のようだ。そして鋸びついてる…だがそれは鋸びついているのではない。黒く乾いた血がこびりついているのだ。

女は悲鳴を上げた。その叫び声は路地に恐ろしいほど響き渡つた。

自警団副隊長カールはタムズの家に引き返しているところだつた。霧がさらに濃くなつていた。靴の中までじつとりと濡れるほど濃い霧だ。足を止め不快な足元に目を向けた時だつた。通りに女の悲鳴が響きわたつた。耳を疑つほど恐ろしい悲鳴だつた。カールは一瞬身を縮めたが、その悲鳴はずつと続いている。

カールは辺りを見渡した。どの路地からも聞こえてくる気がする。世界がぐるぐると回る。やみくもにカールは走り始めた。悲鳴を耳に聞きながら、激しく高鳴る鼓動を胸に感じながら…。

女の服はズタズタに引き裂かれ道に散らばつていて。霧がゆれるそのクズきれが霧の隙間に見え隠れする。服を身にまとつていない女の裸体がずるずると霧の中を引きずられ路地裏に消えていく…。髪をつかみ重くなつた女の体をスプリング・ヒールド・ジャックは引きずつっていた。傷だらけの体から血が流れ出していた。女はもう悲鳴をあげることができなくなつている。すでに女の首は深くえぐ

られそこからドクドクと音を立てて血が流れ出ていた。

スプリング・ヒールド・ジャックは振り向き女をみた。黒目が上を向き、唇がガタガタを揺れている。その口元から泡のよつに血が湧き出しはじめた。

スプリング・ヒールド・ジャックは女の髪を離した。力なく女の頭が地面に落ちる。

低いうなり声が路地裏に響いた。頭を抱え込むと口元から恐ろしいほどの煙をスプリング・ヒールド・ジャックは吐き出し始めた。目の炎はさらに明るくひかつた。

喉を抑えると口から凄まじい音とともに炎を吐き出した。女の髪は一瞬にして黒く焼け焦げ吹き飛んだ、体がねじれ関節が異様に曲がった。死んでいるはずの体が生き返ったように動いている。

女の体が静かになるとスプリング・ヒールド・ジャックは膝を地面に落とした。

うめき声をあげ立ち上がる、壁に手をあて体を支えると踵を地面に激しくたたきつけた。

カールは広い通りでた。揺れる霧のなか妙な音が聞こえる。何かを引きずる音…。足元の霧の隙間に引き裂かれた布切れが見える。カールは膝をつきその一枚を手に取つた。赤い血がついていた。

耳に聞こえる奇妙な音に耳を傾けあたりを見渡した。黒いなにかが少し離れた路地にずるずると入り込んでいく。誰かが腹ばいになり道を這い進んでいるように見えた。膝下の部分だけが見えた。しかし這い進んでいるのではないのはすぐに分かつた。つま先が上を向いている。引きずられているのだ、何かが路地裏に人間を引きずり込もうとしているのだった…。

カールはサーベルを鞘から抜くと身構えた。そして息を飲む…。

その瞬間、通りが凄まじい炎の音とともに明るく光つた。カールは地面に転がつたが、いそいで立ち上ると駆け出した。カールの耳に鉄が弾けるような音が響いた。それは頭の上から聞こえてくる。

カールは路地の入口につくと屋根を見た。誰もいない。鉄がはじける音は遠くなりあたりは静寂を取り戻そうとした、そのときカールは足元に恐ろしいものが転がっているのに気付いた。黒焦げになつた人だつた。男なのか、女なのかわからなかつた。煙を上げ、肉の焼けるにおいを漂わせていた。口を開き関節が曲がっているためかまるでカールに助けを求めているように見える。

腰に力が入らなくなり地面に倒れ込むと目に涙を浮かべながらカールは小さなうめき声を上げる…。

どのくらいそうしていたのだろう…。誰かが来て彼のわきを持ち上げ、助け上げるまでの時間を、そしてそのあとのこと…。ぼんやりと夢をみているだけのような…長い時間だつた。

7・デスダスト・

キッショムは小屋に戻つてくるとドアを後ろ手にしめた。ドアにもたれかかりぼんやりと天井を眺めている。棚の上にある大きなガラスの瓶を眺めた。三つ並んだ大きな瓶はすでに一つが空になつており、残る一つには緑色のパウダー状の粉が半分ほどになつっていた。デスダストだつた。死人の腐敗を防ぎ、傷を癒す。

キッショムはデスダストがこれほど少なくなつたのを見たことがなかつた。減らしたのは自分だつたがどうすることもできなかつた。いつの間にかデスダストを作るのをさぼるよつになつていた。作ろうと思うのだが、作らなかつた。ただの怠慢に思える。自分が情けなく思えた。

ドアから背中を離すと大きな黒々とした窯に近づく。キッショムが見上げるほど大きな鉄の塊だ。両開きの扉は重く、一度に開くことはできなかつた。片方ずつ身を入れて扉を開くと、内側にもう一つの鉄の塊、二重の窯になつてゐるのだつた。そこにも扉がついていた。小さな鍵穴のついた扉だ。

襟元に手を突っ込み鎖のついた小さな鍵を取り出した。鍵を鍵穴に差し込みまわしすと窯がガタガタと音をたてた。両側から鉄の杭が一本飛び出す。キッショムは杭を掴むと一本を上に引き上げ、もう一本を下に引き下ろした。ガタリという音とともに鍵が外れ扉が浮き上がり隙間から赤い光が漏れ出した。

扉を開くと格子状の鉄の枠が現れる。その真ん中に赤い水晶玉がある。だがその水晶玉は赤く見えるだけだ。窯の中に炎がありその水晶玉を通して炎を見ることができるようになつてゐるのだつた。

キッショムはその水晶を覗き込み炎を見つめた。キッショムの顔が赤く照らし出される。水晶を通して見る炎はさかさまに映し出さ

れ、まるで滝のように流れ落ちている。

キッチョムの瞳の中にも炎が映し出された。炎がどんどん強くなつていいく…トグロを巻いて上も下もわからなくなる。窯がガタガタと揺れ始める。炎の奥底から人の悲鳴が聞こえ始めた。キッチョムは耳を澄ます。そして瞳を閉じた。

突然、窯が吹き飛んだかのような凄まじい音がキッチョムの耳に響いた。炎はキッチョムの足元を音を立てて走り、凄まじい風を巻き起こした。雷鳴が響き渡る…。

キッチョムはゆっくりと瞼を持ち上げた。すでにキッチョムの立っているのは墓守の小屋ではなかつた。天がわれたかのような赤い落雷が幾重も走り。遠くから止むことのない悲鳴が聞こえる。黒い土の地面に赤い血が湯気を立てながれていた。焦げ臭いにおい、微かに硫黄のようなにおいが混じつている。まるでデスダストのようにおいがした。ここは地獄だつた。

いや、地獄の入口だ。そうエギオンは教えてくれた。そして墓守は地獄の入口からけつして足を踏み出してはならないと…それは墓守のタブーの一つだ。

何世代遡るのだろうか、昔一人の墓守がいた。彼の名前はそう、『ルカ』だ。地獄から『地獄の炎』を持ち帰つた男だ。どうやつて生きたまま地獄へいったのだろうか？いまや第2の窯に収められている地獄の炎を通して墓守たちは地獄の入口にたつことができるようになつていた。

当時デスマストを作るためには何年も時間をかける必要があつた。しかし、ルカの持ち帰つた地獄の炎はたつた七日でデスマストをみごと完成させたのだ。そしてその炎はけつして消すことはできない…。永遠に…。

キッチョムの耳にエギオンの声が聞こえる…。子供のころキッチ

ヨムはエギオンと共にこの地獄に来たことがあった。少年だったキツチヨムは恐怖で震えていた。目に涙をためながらズッとエギオンの足にしがみついていた。

『何世代にもわたり墓守は命を懸けてきたのだ。デスマストを少しでも完璧なものにするために…。見るがいい、ここが我々の聖地だ』

…』

キツチヨムは辺りを見渡した。どこを見渡しても同じ景色、雷鳴と悲鳴、血の河と吹きすさぶ風。どこを向いても不思議と正面から風が吹いてくる。

『いいか、キツチヨム約束してくれ、決して捷に背かないと…。捷は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せなかつたが、彼らはわたしたちにいくつかのタブーを残したのだ、わかるな?』

少年だったキツチヨムにはよくわからなかつた。でも頷いた。この場所がとても恐ろしかつたからだ。

エギオンは地に膝をつけるとキツチヨムに目線を合わせた。優しく微笑んでいる。

『もう帰ろう…』

その言葉を聞くとキツチヨムの瞳から自然と涙がこぼれ落ちた。エギオンにしがみつくと何度もうなずいた。

『帰る…。墓守は地獄の入口からけつして足を踏み出しつばならない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのはここまでだ…』

…キッチャムはまつべと田を開じた。雷鳴も悲鳴も、燃え盛る炎の音も遠くなつて…。

…つれに瞼を開くとキッチャムはもとこた小屋に立つていた。

薄暗く冷たい小屋の中は乱れていた。確かに部屋に存在するものはあるべきところへ収められていたが、この部屋の空気がそう思われるのだろう。

キッショムは部屋の中を見渡した。幾世代にもわたり、墓守たちはこの部屋での生活を強いられた。扉は自由に開き、自由に出入りすることができた。窓も開くことができる、との新鮮な空気を部屋に入れる 것도できる。しかしここは牢獄のようだ。そしてなぜか逃げ出したものはいない。

キッショムは扉に目をやつた。扉に古い傷がついている。何者が搔き彂いた跡がのこされていた。爪が割れ血の跡が黒く木の扉にしみこんでいた。ベットの柱には深く削られた後、キッショムはここに鎖でつながれた何かがあつたと思っている。そしてそれは墓守自身をつないだものであることも容易に想像できた。この部屋の黒く変色した汚れ……。そのすべてが血の跡であることも……。

天井の柱の張りにも無数の傷跡、首を吊りつけたのは何代目の墓守だろう……。

世界のどこから連れてこられた凶悪な犯罪者たちはこの墓場で残りの人生をソルマントの墓守として過ごした。先代の墓守のエギオンもまた犯罪者だ。彼はそのことを否定したことになかったし、過去を語ることは一切しなかった……。

ただ、キッショムは違った。

『お前は、ちがう……。お前は特別な存在なんだよ……』エギオンはそういった。彼は犯罪を犯したことなどなかった。人から恨みをかうことなく、この墓場でひつそりと生きてきたのだ。彼は物心ついたころから、このソルマントにいた。孤児だった。

エギオン……もし僕が特別な存在だったとしても、それは僕にとって

てどんな意味があるの？いま、キッショムはそうエギオンに聞いたかった。僕はルカのように偉業を成し遂げるような存在じゃない。それに偉業をなしどうたとしても、僕に目を向けてくれる人はいるの…？僕に目を向けてくれる人なんていないだろ？…。僕はソルマントの墓守だ。

たとえ墓守の歴史の中でも特別だとして、僕はこの世界でもっとも孤独な存在だ。ねえ、エギオン、だれが僕に温かい目を向けてくれるの？

僕には父も母もない。もし父親と呼んでいいなら、エギオン、あなたが僕の父親だ…。キッショムはマントを脱ぎ壁にかけた。黒く艶のある重いマント、エギオンが残したマントだった。ぼんやりとマントを眺める。手を伸ばしてマントに触れた。

でも、あなたももついない…。

7 · - テスダスト - 3 (前書き)

キッショムはマントから手を離すと書棚の前に歩み寄る。壁いっぱいに書棚が並べられ、乱雑に書物やひもで縛つた書類が放り込まれている。キッショムは何冊かの本に目を通していた。しかしどれもエギオンがキッショムに話してくれた内容だった。だからほとんどの本に目を通していない。残りの本や書類も結局すべてエギオンがキッショムに教えたことばかりだろうから…。エギオンは朝日が昇る時間になつても書物を開いていた。夕暮れ近くキッショムが日を覚ますと書物を開いたまま居眠りをしている。そんなことが日常茶飯事だった。

キッショムは書棚に歩み寄ると本と壁の間に手を差し入れた。右手で落ちそうになる本を支えながら分厚い一冊の本を取り出した。ページとページの間にメモや何かがたくさん挟まつており、それらがあちこちから飛び出していた。それらが落ちてしまわないようこ革ひもできつく結ばれている。

それを机の上に置くと革ひもをほどいた。その本はバサリと音をたてて開き、メモや紙切れがページから吐き出された。キッショムは折りたたまれた分厚い紙をとりだすと本を傍らに引き寄せ机の上に広げた。

地図だった。スタンが言つことは世界の何百分、何万分の一の地図…。この地図は世界の実際の大きさよりもっと小さいかもしなかつた。そして海は描かれている陸地よりもっと大きい。世界のほとんどが水でできているらしいのだ。キッショムはスタンがまた冗談をいつてるのかと思った。地図の上では海はまるで川のようだったからだ。だが、この陸地の端から川を挟んだ向こう岸は天気がよく晴れ渡つても、どんなに目を凝らしても見えないほど距離があるのだとスタンはいつていた。

そしてソルマントは小さな点、いや点よりも小さい。この辺りだ

…。キッショムは地図に顔を近づけ覗き込むが見えるはずがなかつた。スタンはキッショムが地図を覗き込むのをみると腹を抱えて笑うのだった。世界のどこをさがしても地図を覗き込むのはキッショムだけだといつ…。たしかに…おかしかつた。

地図から目を離し、本のページをめくるとそこには大きな黄金の町が描かれている。たくさんの人や馬がとても小さく、豆粒のようだ。スタンは笑つて教えてくれた。これは宮殿で國を治める王が住んでいるのだと。それが町ではなく宮殿であることに驚いた。いつたい王様はどんな生活をしているのだろう…。宮殿の周りにうつすら影の部分があつた。そこに町の人々が住んでいるのだといつ。影の部分は遠くうつすらとどこまでも続いている。とても大きな都市だ…。スタンがいうには東へ行けば氷で宮殿を作った女王がいるとのことだった。氷の宮殿…。一度でいいキッショムはその宮殿を、世界中の宮殿を見てみたいと思つた。

たつた一冊の本を見ているだけで、キッショムはまるで夢の世界を覗き見ている気分だつた。墓守の残した書物やデスマストがとてもちつぽけに思える。

ページをめくると一枚の紙切れが机の上に落ちた。その紙切れを手に取つた。それはスタンがキッショムにくれた船の半券だつた。キッショムがどうしても欲しいとスタンにせがんだものだつた。

本のページを見ると大きな帆船の絵があつた。三角形の帆と四角形の帆を幾重も重ねたその船は地平線をバックに白い水しぶきを高々と上げていた。帆は膨らみ風をしっかりと捕まえている。帆船は風を受け馬よりも早く走るらしい、とてつもなく大きいのに海の上を浮かんで進むのだ。

スタンはこれに乗つて海の向こうグレートブリテンというところに行つた。紙切れはその時の半券だつた。残念ながら残りの半分は船乗りが持つて行つたといつことだつた。それが船に乗る時の決まりらしい。

半券をスタンがゴミだといつて捨てようとしたのを見て慌ててキ

「キッショムはいらないなら欲しいといった。スタンは怪訝な顔でキッショムに半券を差し出したが、なんども「もう乗れないからな」といった。キッショムは半券を掲げて眺めながら何度もうなずいた。スタンの言つことなど耳に届いていなかつた。「うれしくてしかたなかつた。これを持つていればいつか自分もあの船に乗れるような気がした…。

そしてこの本をスタンがキッショムにくれたのは、彼が死んで、キッショムの前に初めてソルマントの死人として姿を現した日だ。彼はキッショムの前に歩み寄ると本を差し出しこういった。

「死人には必要ないからな…」そう言つて笑つていた…。

その日から毎日この本を読んだ、メモの細部まで。しつこくスタンに話をせがみいろんな話を聞かせてもらつた。キッショムが不思議に思うことは彼がなんでも説明してくれた。本を開くと胸が高鳴り、まるで知らない土地を渡り歩いている気分になれた…。

しかし、ある日ふと、氣付いたのだ。温かいスープを飲んでいた時だつたろうか…。それとも布団に潜り込んで寝返りをうつた時だつたろうか…。キッショムの胸に、耳に、いまはもう体の感覚だけが記憶してゐ…。それは突然やつてきた…。

「死人に必要なものは、墓守にも必要ない…」

キッショムはこの本を革の紐で硬く結び、書棚の奥へ、見えないところへねじ込んだ。悔しくて、情けなくて…いいようのない悲しみが彼を苦しめた。

それでもキッショムは笑つて過ごせた。デスマスクを作り、ワインを飲み、死人とダンスを踊つたり…。歌を歌つたり…。ソルマントの墓守をちゃんとやってのけた、ずっと笑つて過ごせるはずだつ

た。あの日までは…。グレスフォードの老婦人と言葉を交わすまで
は…。

8・グレスフォードの老婦人

暗い森の道を馬の背に揺られキッショムはレイモンドの町へと向かっていた。深い闇が森を覆い、その闇に木立の影も飲み込まれるほどだった。栗毛の馬は鼻をならしながら草の匂いを嗅いだり、木々の隙間に見える青い空をぼんやり眺めながら歩を進めた。まるで散歩でもくり出したかのように歩を進めている。

キッショムは夜目が効いた。幼い頃からといつよりずっと夜の世界でいきっていたからだろう…。教会の人間が首をかしげ不思議に思うほど夜の世界を光なしで驚くほど速く走ることができたし、どこになにがあるのか初めから知っていたかのようにあらゆるものを見闇の中から見つけることができた。それでもキッショムはみんなと同じようにランプを使い、ロウソクを灯してすこてきた。

しかしこの日は明かりを持つて行かないようにしている。もう、何年もそういう習慣になっていた。

この日は町に寄進品を集めにでかける日だった。
レイジーの鼻の向ける方向には黒い棘のような草が生えているばかり、見上げた空には星は見当たらなかった。

「レイジー。あまり遅いと日が昇るだろ?」。いつもと変わらない森がずっと続いているだけだよ…」

キッショムは笑みを浮かべるとレイジー・フォンデモンテの太い首筋を撫でた。暗い夜道でも微かに光沢を放つその栗毛の毛並みは滑らかで温かかった。

わかってるよ…。レイジーはそう言いたげに鼻を鳴らした。でも、レイジーフォンデモンテは軽快に蹄の音を闇にしばらく響かせると、忘れてしまったかのように速度を落とした。

「ああ…」キッショムは苦笑いを浮かべ、懐からかすかになつたパンを取り出し口に運んだ。

じつのところレイジー・フォンデモンテは自分のするべきことをしっかりと理解していた。墓守と町に入つたら絶対に足をとめるな。これは絶対だつた。足を止めず全速力で駆け抜けるのだ。一筆書きで線を描くように町の入り組んだ通りを一気に駆け抜ける。けつして墓守の手綱に頼つてはいけない。

ロシュフォール・レックス、馬小屋の主からきつく言い聞かされてきた。彼の黒毛は月の光をうけてとても艶やかに輝く、どの馬よりも早く走れて力が強かつた。そしてだれよりも、もしかした人間よりも頭がいい馬かもしれなかつた。

彼らがひたすら風を切り蹄で地面を蹴つてゐる間、墓守は道に放り投げられてる白い袋を器用に馬上から鉤棒で取り上げては背中に取り付けられたたくさんのはづきにひつかけていく。白い袋を一つとして逃すことはない。

少しづつ背中が重くなつてくるがレイジー・フォンデモンテに取つては大したことではなかつた。

いつのころからか彼にとってこの仕事は一番大好きな仕事になつていた。だから彼は体力を温存させていた。

そしてキッショムを背中に乗せての町へ寄進品を集めに行くみちすがら、のんびりした時間を過ごせるのはこの時だけだつた。彼はこの仕事が大好きだつたが、キッショムはもつと大好きだつた。

キッショムが手綱を強く握りしめるのがわかつた。手綱をとおして彼の緊張感がレイジー・フォンデモンテに伝わつた。レイジーが顔を上げると木々の隙間にグレスデンの塔バルバドスが見えた。町にたてられたバルバドスの塔は中心に高くそびえたつているのだ。町はもうすぐそこだつた。

グレスデンの周りに茂る木々や草花の間には崩れた人の手が加わっているであろう小さな岩山がどころどころに頭を出している。それはこの町が城下町であり城壁で囲まれていたことを物語っていた。当時は今以上に繁栄していたことだろう。当時の面影を残すものはすべて遺跡のようにひつそりと町の風景に溶け込み、いつのまにか誰からも顧みられることはなくなっていた。

土の道がしだいに薄くなりところどころ石畳が現れた。丸いゴツゴツした石畳にうつすらと残る轍の跡がこの町の古さを物語つているがキッショムは気にせず手綱を握った。レイジーの蹄の音色が蹄鉄の石を叩く乾いた音にかわっていく。町の入口が見えた。灰色の石畳が闇へとづびてるようだ。町の灯はこの日極端に少なくなり、グレスデンの町はひとつそりと静まり返っている。闇に包まれる町は大きな口を開けているようだった。その口はキッショムとレイジーを飲み込む。あとは聞き耳を立て彼らが去っていくのをじっと待っているだけだった。

キッショムは鉤棒を握りしめ強く手綱を引いた。緊張感がレイジーの前足を高々と上げさせた。レイジーは前足で空を搔きむしると勢いよく首を振り下ろした。レイジーの前足が石畳を激しく叩くとキッショムは風に包まれた。激しく吹き付ける風を交わすようにキッショムは上半身をかがめ、あぶみに乗せた足をレイジーの横つ腹にしつかりと固定した。両手でしつかりと鉤棒を握りしめる。

「ハアッ！」

キッショムは足を緩め叫び声と共にレイジーの横つ腹をあぶみで蹴りつけた。「まだ…君はもつとはやく走れるんだ！」レイジーにはキッショムの言いたいことが手に取るように分かった。彼の体の中から熱いものが込みあげてくる。叫び声を上げずにはいられない

かつた。

レイジーのいななきは石畳を飛び跳ね、家々の壁にぶつかり夜の闇に響き渡った。

キッショムとレイジーは町の入口を蹄鉄の音を打ち鳴らし、落雷が天を裂くようなスピードで駆け抜けた。

風はキッショムの耳元で悲鳴を上げた。暗い街並みが風に吹き飛ばされていく。吹き付ける風を真っ向から迎え撃つようにキッショムは目を見開いた。道に転がる白い袋が彼の目に飛び込んでくる。マントが風を捕まえようと激しく音を立てている。

右に流れゆこうとする袋をまるで川の中の魚を捕らえるかのように目の端でとらえるとキッショムは鉤棒を振るつた。すでに次の袋をキッショムはその目に捕らえていた。鉤棒の先に引っかかった袋はキッショムの周りを円を描くように吹き飛んだ。キッショムは上半身を後ろに倒しそのまま次の袋を鉤棒で捕まえた。

一瞬の出来事だった、二つの袋は鞍のフックに収まった。しかし袋は恐ろしいほどの勢いでまだ流れてくれる。

レイジーは必死に走った。その瞬間、鉤棒の間合いよりも遠い場所に袋が流れしていくのが目に映つた。でも止まらなかつた。

「絶対にとまるものか！！」

キッショムは片足をあぶみから離し、レイジーを跨ぐと濁流のようになに流れしていく石畳に今にも飛び込もうとする。あぶみに残つた片足に力を入れると体を流れに落とした。手を伸ばし、鉤棒を槍のように突きつける。キッショムの体が地面に落ちていく。手首をねじり力を入れ、鉤棒を天にかざした。奥歯を力いっぱいかみ合わせると自由な足を振り上げる。そして激しく流れゆく石畳を鉤棒の末端で力の限り弾いた。

キッショムの体が宙に浮いた。あぶみにかかつた足を軸に体重を移動させ片足を鞍に乗せた。キッショムの左手に袋が落ちてくる。鉤棒の末端を握るとキッショムは鉤棒を大きく振り回す。目の前

に流れてくる袋は消えてしまつたかのように鉤棒の先が持つて行つてしまふ。鞍につながれた袋は確実に数を増やしていった。レイジーの耳の後ろでキッショムのマントが音を立てて暴れていた。

レイジーの前方に黒く大きな壁が立ちはだかつた。ロシュフォール・レックスの黒い壁だ。ロシュフォールは言った。『俺はある道を全速力で駆け抜け壁に突つ込み、そして曲がることができぬ……』

「僕にだつて……！」

黒く大きな壁は驚くべきスピードでレイジーに迫つてくる。

「とまるもんか！！絶対に足を緩めないからな……！」

レイジーは首を激しく振りたてがみを搖さぶると、さらさらきつくなし石畳を叩いた。レイジーの目線が壁伝いに連なる暗い路地に向かれた。曲がり角だ。

激しく石畳を蹴りながら体を倒す。全体重が四本の足にかかる。首を低く落とそうとするがレイジーの首は浮き上がりしていく。体が徐々にバランスを失っていく。レイジーの首筋に冷たい汗が噴き出した。曲がりきれそうになかった。

「吹き飛ばされる！！」

レイジーは足を跳ね上げ目を閉じた。

キッショムの田にも、迫りくる壁が見えた。あぶみから両足を外した。レイジーの体が激しく傾くと鞍を蹴った。宙に投げ飛ばされる瞬間反転し片手で鞍を掴む。レイジーの体を引き寄せ、力いっぽいあぶみに片足を踏み入れレイジーの体を固定した。宙を舞う手綱がキッショムの視野に入った。両手は塞がっていた。キッショムは目を見開くと目の前の手綱に噛みつき、首の筋が切れんばかりに手綱を引きあげた。

レイジーの首に力が加わつた。突然レイジーの体はバランスを取り戻した。暗い路地に恐ろしい速さで吸い込まれていく。

レイジーが目を開いた時、暗い路地が吹き飛び月の光が届く広い通りがすぐそこに迫っていた。前足を高々と上げながら、後ろ脚を蹴り上げた。キッチョムを背に宙を舞つた。キッチョムが叫び声を上げた。

「レイジー、レイジー、君はす”い！！」

月の光で輝く石畳に蹄鉄の音が響きたつたときレイジーは今までにない最高の気分を味わっていた。

「僕はいま最高の仕事をしたんだ！！」

だからといってレイジーは足を止めなかつた。『墓守と町に入つたら絶対に足をとめるな…』だ。

レイジーは悔しそうで足を踏み鳴らした。首を振り地団駄を踏んでいる「びひして…こんなことに…」レイジーは悔しくてたまらなかつた。最高の仕事をした矢先、広い通りを曲がつたところでキッチヨムは綱を強く引き、レイジーの前足を振り上げさせ首をあらぬ方向へ向けさせたのだ。レイジーはわけがわからず暴れる以外しようがなかつた。

「落ち着いてレイジー！ 落ち着くんだ！」馬上でキッチヨムが叫んでいる。手綱を右に左に引きながらレイジーが暴れるのを制止させようとする。

「あれを、あれを見て…」

ようやくレイジーは落ち着きを取り戻した。暗い道の先に明るい光がほんやりと揺れている。右へ…左へ…右へ…黒い影がランプを持つてなにか合図を自分たちに送つているらしかつた。

レイジーがおとなしくなると、闇にほんやり浮かぶランプの光はぴたりと止まつた。自分の存在を知らせるためにランプを振つていたのは明らかだつた。キッチヨムは馬上でしばらくランプを見つめていたが意を決したようにあぶみから足を離してレイジーの背中から飛び降りた。

レイジーは首を振り鼻を鳴らした。寄進品集めで足を止めてしまつたうえに、墓守が背中から降りてしまつなんて…あつてはならないことだ。

キッチヨムはレイジーに田を向けると彼の鼻筋を撫でた「怖がらなくていいぞ…、大丈夫…」そういうとキッチヨムはランプの光に田を向けた。手綱を引き歩き始める。

これ以上ひどいことは起こりそつになかつた、レイジーにとつて最悪の出来事はとつぐに起きてしまつたんだから。力なく首を落とすと手綱にひかれるままレイジーは歩を進めた。さつきまでの最高

の気分が嘘のように消し飛んでいた。

キッショムは光に近づく道すがら腰を落として白い袋をひとつ捨
い上げ鞍のフックにひっかけた。歩みを進めていくとランプの光が
大きなコートの男を闇に浮かび上がらせた。大きな男だ、でもマツ
チ棒のように痩せていた。初老の男すでに背筋が幾分まがつてい
る。まるで首が転げ落ちてきそうだった。

キッショムがレイジーを引き連れ近づくと後ずさりをして大きな
門の影に隠れようとする。おびえているように見えた。それを見て
キッショムが足を止めると、今度は激しく手招きをする。キッショ
ムが男のそばまで来るころには門を馬一頭通れるほど開いて体を隠
し顔とランプだけをのぞかせていた。キッショムが少し見上げなけ
ればならないくらいのその大男は声を押し殺していった。

「な、なにをしているんですか！？はやく、はやく中へお入りくだ
さい！！」男は声を落としていたが丁寧な物言いとは裏腹に焦りと
いら立ちが感じられる強い言ひ方をした。

しかし、キッショムは大きな門を見わたし、闇の道に沿つてどこ
までも続くような塀に目を奪われた。ここはたしか、グレスフォー
ドの屋敷だ。キッショムでもそれぐらいのことは知っていた。モリ
スや神父の話にときどき出てくる名前だったからだ。

「町の者にみられるわけには行かないんです！早くお入りください
！」そういうと男は門の中に逃げるように入つていく。首を振りと
どまろうとするレイジーを引っ張りながらキッショムは門の中に入
る。レイジーは敷地内に足を踏み込むと諦めたように歩き始めた。

敷地の中に入るとあたりを見わたす。広い庭の真ん中にとても巨
大な岩があった。石というより崩れた壁だ。城壁の一部だろうか…。
もしかしたら以前は目の前の大好きな屋敷よりももつと大きい、空を
覆い隠すような大きな城が目の前にそびえていたのかもしれない。
キッショムはそんなことを考えた。巨石の周りは手入れの行き
届いた芝生が円形の島を作つており周りを石畳の道が取り囲んでい

た。

大きな観音開きの扉が前方に見える。数段の石の階段の上に立つ。その扉は教会の扉ほどの大きさがあるが、もつと厚く重そうに見えた。その扉の石段のそばに一人の少年の影があつた。どうやら大きなハンチング帽をかぶっているらしく体に不釣り合いな大きな頭をしている。

大きな男はキッショムとレイジーを残し足早に進み、少年の前に立ち何やら話をしていた。大きなマツチ棒のような男と体に不釣り合的なハンチング帽をかぶる少年の影がああだこうだと体を動かしている。まるで影絵芝居の人形のようでとても滑稽だった。

男はキッショムに体を向けるとはげしく手招きをした。

キッショムは足を少し早めて男のもとに近づいていく。しかし男は自ら少年を引き連れやつてくると「お急ぎください…手綱を…」そういうとレイジーの手綱をキッショムの手から半ば強引に奪い少年に引き渡した。「彼は馬の世話係です…、さ、はやく奥様がお待ちです…」

奥様…?グレースフォードの婦人だ…「彼女がいつたい、僕に…?」そう聞きたがつたが目の前でレイジーが鼻を鳴らしていまにも声をあげそうになつていて。少年が腰を引いてレイジーをひっぱり始めた。あわてて鼻筋を撫で「大丈夫、すぐもじるよ」とキッショムがいうといやいながらもレイジーは觀念したようだつた。

男はすでに歩き出しており、足早にまっすぐ扉に向かつていた。キッショムもレイジーの手綱を離すと男の足に合わせて足早についていくしかなかつた。

8・グレスフォードの老婦人・4・

グレスフォードの大きな扉が人ひとり通れるほど開かれていた。キッチヨムが覗き込むと中は意外にも真っ暗だつた。ランプの光に照らされてぼんやりと闇の中に男が浮いている。先に行く男はすでに階段に足をかけキッチヨムを待つていた。

キッチヨムが中に足を踏み入れると階段の中段まで上がつて手招きをした。

歩きながらあたりを見わたすとキッチヨムの目は驚くほど早く暗闇に慣れていく、瞳孔が光をかき集めるように開く。キッチヨムの目は不思議なレンズのようだつた。

キッチヨムの目はうつすらと一階の廊下、扉などをうつすら見て取れることができるようになつた。

玄関はひろく綺麗に磨かれた石で格子状に覆われている。ランプの光を受けて光つていた。赤い絨毯が引かれている。しかしこれどころ擦り切れている。正面の大きな階段は途中で二手に分かれており、ちょうど踊り場のようになつていて。そこには一枚の大きな肖像画がかけられていた。男は左側に上がりしていく階段に足をかけて踊り場でキッチヨムを待つていた。

キッチヨムは踊り場まであがると肖像画を見上げた。ふたつの絵に描かれた人物は同一人物だ。ブラウンの髪と口髭。やさしい目がとても印象的な男だ。ゆつたりとした服を着て椅子に腰かけ微かに笑みを浮かべている。キッチヨムは自分の中の好奇心がゆつくりと頭をもたげ始めるのを感じていた。まるでさつきまでの不安を覆い隠すようにそれは心を支配していく、まるでスタンがくれた本を読んでる時と同じような鼓動の高鳴りを感じた。

もう一方の絵のその男は鎧を身にまとつて立ちあがつていた。遠くをにらみつけるような目をしている。室内の椅子に腰かけている優しい目とは対照的に勇ましい印象をうける。なんだか背筋を思い

つきりひっぱたかれたような、居住まいを正さずにはいられない圧迫感があった。

「ゴホンッ……」突然闇に響いた咳払いにキッショムは目を上げた。ランプが目の前に近づけられていた。一瞬目の前が白一色になる。瞳孔が激しく収縮する。キッショムは目を閉じずにいられなかつた。

男はキッショムが頭を激しく振るのを歯牙にもかけず階段を音もなく上がつていった。激しく瞬きするとキッショムは慌てて男の後に続いていく、階段をあがると暗い廊下の先に男のランプが揺れていた。廊下の四方を照らし出しながら男の背中を浮かび上がせている。不意に足をとめドアに耳を近づけ軽くノックを繰り返した。大きな屋敷だつたが意外と早く目的の部屋についたらしい。キッショムは少し残念に思わずに入れなかつた。

男は小さなノックを何度も繰り返した。するとすぐに扉の向こうから返事が聞こえた。

「はいりなさい……」

男は扉を開いた。

「彼を連れてまいりました。すぐここへ……」そういうながら暗い廊下に目を向けようとした。「なつ……！」

キッショムはいつの間にか男のすぐ後ろに立つていた。腰をすこしがめ中を覗き込んでいるのである。わきの下のキッショムの見開かれた目と男の視線が合わさつた。

男はキッショムをにらみつけた。キッショムはキヨトンとした目をしていたが、なにかを察知したのか背筋を伸ばすと一步下がつた。「なにをしているのです？はやく入りなさい」

グレスフォードの老婦人は年老いていたがも声には力がこもつており、背筋を伸ばして立つ姿は年を感じさせないものがあった。本を読んでいたのである分厚い本に手をおいていた。

男が身を引いたので言われるがままキッショムは部屋の中に入つ

た。

「「コールリッジ…」

男は名を呼ばれると黙つてうなずきドアを閉めた。

とり残されたキッショムは部屋の中をぼんやりと見わたした。なんだか夢の中にいる気分だつた。壁に掛けられた燭台には真新しい蝋燭がたてられ、ランプが暖かい光をあたりに向けていた。とても明るい部屋だつた。しかしそこは客間とは程遠い部屋だ。老婦人が座つていただろうソファと椅子、書物の置かれているテーブル以外の家具は白い布をほこりよけに被つていた。どうやらキッショムは歓迎されていいるわけではなかつた。

「オーハン・キッショム…」キッショムは不意に名前を呼ばれて老婦人をみた。

ブロンドの髪は頭の上に束ねられ、注意深く見るとところどころ白くなつていてるのがわかつた。大きなエメラルドグリーンの瞳の周りには深くしわが刻まれ、皮膚が乾いているような印象を与える。口元に刻まれたしわは浅かつたが首筋にまで伸びいていた。

背筋を伸ばしていると大柄な体がさらに大きく見える。肖像画の鎧を着ていた男を思い出さずにはいられなかつた。

老婦人はキッショムに背を向けると窓に向かつて歩き始めた。

「エギオン…」キッショムは自分の名前につけたすように二つ言つた。「僕はオーハン・キッショム・エギオン」

「その名前を使うのはやめになさい…」老婦人は一瞬足を止めるとつぶやくように言つた。窓のそばに歩み寄るとガラスに映るキッショムをみた。

キッショムはアーネの後姿を見つめた。とても居心地が悪かつた。さつきまで頭をもたげていた好奇心はとつぐに消し飛んでいた。ガラスに映る老婦人とキッショムの視線がぶつかつた。

「わたしは、アーネ・グレスフォード。私のことはこれ以上話すつもりはありません…、それにあなたにとつてはどうでもいいことです」

キッショムは視線を落とした。自分がなぜここにいるかまったく見当がつかなかつたからだ。まるで叱られているような気分だつた。そんなキッショムには無関心にアーネは続けた。

「時間がありません。単刀直入にもうしましよう。墓守をおやめなさい…」

キッショムは顔を上げた。よくわからなかつたのだ。やめる…？ 墓守を…？

アーネはキッショムに体を向けると反応を見るようにその眼を見つめた。だが、その眼からは得るものがなかつたのだろう。

「いいですか？わたしは、墓守をやめなさい、そういうのです」

キッショムは目線を落とし床を見つめた。キッショムから考える能力が失われていた。足元に答えを探す。あらぬ方向に目を向け目に映るものの中に何かしらの答えを探そうとしている。

しかしアーネは構わずつづけた。

「あなたは墓守には向いていない。代わりの者は簡単に見つかるでしょう。神父が用意できないなら、私が枢機卿に手をまわします。あなたより墓守にふさわしい犯罪者が世の中にはたくさんいるのですから…」

キッショムの頭の中に遠くで鳴る鐘のようにぼんやりとアーネの言葉が響き渡つていて。声が響いてくる先に耳を傾け、それを探そうとする。

「あなたは町で普通の生活を送ればよいのです…、太陽とともに日覚え、月が昇れば眠ればいい。この町にとどまりたくなければそれもいいでしょ…。どこか別の国へ行き、あなたは学問をなさい…。あなたが世の中を理解できるまで、わたしが支援しましょう」

まるで体が宙に浮き始めたようだつた。ぼんやりと体が揺れはじめ、田の前にスタンがくれた本のページがまるで手で触れることができるかのように再現された。それは光とともに現れては消えていく。キッショムはその世界に吸い込まれるような気分だつた。

ただ、一つの言葉がまるで死人に杭を打ち込むようにキッショムの

胸に強く突き刺さつた。

「 条件は、たつたひとつ、あなたが墓守をやめない」とです…

」

8・グレスフォードの老婦人・5・

レイジーは最悪の気分だった。頭を前後に振つてなんとか前足を踏み出す。まさに疲れたような足取りで歩を進めた。クレスフォードの屋敷をしてから、いや、クレスフォードの屋敷の扉を出た時には、すでにキッショムの様子はおかしかった。まるで夢遊病者のような足取りで戻ってきたかと思うと、だまつて鞍にまたがりフードですっぽりと顔を隠したきりあぶみを操ることも忘れていた。レイジーは仕方なく自分で歩を進め、クレスフォードの屋敷をあとにしたのだった。

そしてキッショムはあるうことか白い袋を見逃したのだ。レイジーがのんびり白い袋の横を通り過ぎようとしたとき、キッショムはピクリとも反応しなかつた。走つてゐるのではない、レイジーはただ歩いていたのだ。レイジーは慌てて鼻をならした。キッショムは馬上から降り袋を拾い上げて、フックにひっかけた。馬上からでも簡単に取り上げられたはずだった。

とんでもないことになつたぞ。レイジーは思つた。きっとあの大きな屋敷には魔法を使う悪魔が住んでいたに違いない。キッショムの魂を抜き取つてしまつたのだ。それともキッショムの体の中に別の何かがある。

「レイジー……」馬上に上がつたキッショムからうつろな声が聞こえた。

レイジーの首筋に寒気が走る。冷たい汗が吹き出し、首を持ち上げ石造のように固まつた。両耳をゆつくりと後ろに向ける。

「走りづら……」

え……？ レイジーは胸を撫でおろした。キッショムはキッショムだつた……そう思つた。しかし、突然キッショムは声を荒げた。

「レイジー！ 走るんだ！ 全速力だ！」

キッショムが足にはめたあぶみに恐ろしく力が加わり、レイジー

の横つ腹をはげしく蹴り上げた。手綱を鞭のようにふるい叫んでいる。

前足を大きく振り上げ、いななきを響かせながらレイジーは全速力で走りだした。まるで体を炎で焼かれている気分だった。

今度はキッショムは袋を一つとして逃す気配はなかつた。それ以上にいつもより激しく体を動かしている。キッショムの目が袋をとらえるたびにレイジーの体が右へ左へぶれるのだ。森の暗い木々が迫つてきていた。町の出口だ。

しかしキッショムはレイジーの足が緩むことを許さなかつた。

「レイジー森をつっかかるんだ！止まらないで…ジーマでも…ジーマでも…！」

無茶だつた。森を突つ切るつてことは教会を通り過ぎるつてことだ。悪魔だ…！きっとキッショムの魂は魔法使いに奪われて、かわりに悪魔がキッショムの体を乗つ取つたんだ…！

しかしレイジーがもつとも恐れるのは悪魔ではない。あの馬小屋の主、ロシュフォール・レックスだつた…。

レイジーは教会への入り口で思いつきり足を上げ走るのを拒否した。地団駄を踏み暴れたのだ。キッショムはあぶみに力を入れ、手綱を引いた。

「レイジー！レイジー！わかつてゐるが、教会だろ！？ついたんだ！」

レイジーはふと足を地上にとどめた…。息荒く鼻をならした。馬上から飛び降りたキッショムの顔に目を向けた。とても優しい笑顔をレイジーに向けていた。「さあ、帰ろひ…。今日はたくさん走つた…。疲れたる…？」鼻筋を優しく撫でてくれるキッショムは…、キッショムだつた。

ただキッショムは今まで見たことのないさみしい笑顔をレイジーに向けるようになつっていた…。

夜の静けさはやがて遠ざからうとしていた。遠くの空がかすかに白く色を失うと同時に山の黒い影を日の光がぬぐい去らうとしていた。キッショムは広げた地図をたたみ、分厚い書物の間に挟んだ。革紐で書物をくくり、本棚に置いた。また、知らず知らずのうちにため息をついていた。

僕は墓守をやめるのか…。何度も繰り返しみずからに問いかけていた。ここ数日といつもの頭の中はそのことでいっぱいだ。しかし、墓守をやめるということはどういうことなのかキッショムにとってはさっぱりわからないのだ。ただ突如として牢獄のようなこの小屋を飛び出して、広く青い空の下、草のにおいを運んでくる風の中で、誰かと笑顔でいさつを交わしてみたかった。陽だまりの中で誰かと語り合つてみたかったのだ。

明日、もう一度クレスフォードの屋敷に行こう…。もっともっと彼女の話を聞きたいと思った。そうだ、もう一度彼女の話を聞いてみよう。じつのところの考えがキッショムの脳裏によぎったのは一度や、二度のことではない。けつきよくのところここまで考えが進むと振り出しにもどるのである。そんなことしてどうなるのだろう…？僕は墓守なのに…。

ふと、キッショムは顔をあげた。腫ればつたい目元に一瞬力がこもつた。

「そうだ、グレスフォードの婦人にお願いするんだ…」キッショムはこの考えがしごくまともなように思えた「デブイはおいしいものを食べたがっていた。おいしいワインを…。デスブーツのみんなもきつと同じに違いない。クレスフォードの婦人に頼んでみよう…！あの人はきっととても優しい人なんだ。だから僕を憐れんで墓守をやめていいといつているに違いない。僕に学問もやらせてくれるんだから…、ほかにも何かいつてた、なんだつたつけ？そう、支援だ、

僕のことを支援してくれるつていつてた。だったら、食べ物やワインくらい…。きっと、きっと…」

キッショムは靴音を響かせながら部屋の中を取り留めもなく歩き回った。ふいに足を止めると固い木を組み合わせただけのベッドにその身を投げ出した。大きく息を吸い込み胸が膨らむのを感じ取る。ひさしぶりに胸が躍るのを感じていた。ふと天井に残る傷跡、血のシミ跡が視野に入ったがキッショムの目はそれに向けられことはなかった。無意識に寝返りをうち胸に枕を抱きしめた。そして目を閉じた、早鐘のように鼓動が耳に響いていた。口元には笑みが浮かぶ…どれくらいの時間そうしていたらうか…、やがてキッショムは眠りに落ちていった…。

キッショムが眠りについた小屋の周りに暖かい光が充ち始めた。モリスがあわただしく場所の準備をし、神父を乗せて出かけていく。微かにレイジー やロシュフォールの立てる蹄の音が優しく朝の静けさの中に響いていた。

小屋に忍び込んだ朝の光がキッショムの瞼をかすめる。瞼が微かに振動する…。

キッショムは夢を見ていた。

大地に降り注ぐ日差しの中、とても暖かい風がキッショムの頬を撫でている。レイジーの背にまだがりのんびりとキッショムは小高い丘へ向かっていた。

マントを脱ぎレイジーの首にかけ、手綱を緩めて空を見上げた。澄み渡る空にちぎれた雲が白く宝石のように輝き流れている。森は遠く緑をひろげ、太陽に照らし出される草花は風にやさしく揺れている。鳥たちのさえずりはキッショムがやつてきたことを歓迎するかのように声をあげていた。

ふと道の先に田に向けると小さな口バをつけた農夫がこちらに向かってくる。キッショムは胸の高鳴りを感じながら農夫を見ついていた。口バはレイジーを見ると小さく鼻を鳴らした。そして農夫は

すれ違ひざま笑つていつた。

「よいお天氣ですな…」

キッチョムは満面の笑みで答えた。

「…ええ！…とても…！」

キッチョムはいつまでも農夫の後姿を馬上から見つめていた。農夫の少し曲がった背中がとても愛おしかった。

レイジーが足をとめた。前を向くと小高い丘の上にたどりついていた。眼下には青くどこまでも広がる湖がひろがっていた。

「ああ…、レイジーあれが湖だ…」まるで鏡のようだつた「ほら、空が落ちてきたようだ…。それに…雲が泳いでる…」キッチョムは笑つた。

やがて湖が日の光を反射させてぼんやりと輝き始める、キッチョムはまぶしさで何度もなく瞬きを繰り返した。光の反射は湖面いっぽいに広がる…すると、そこに黄金の宮殿が現れた。

「…ああ、宮殿だ…。見て！レイジー、あの小さな黒い影はみんな人や馬なんだ…。宮殿は王様が住んでいて、この世界を動かしてゐんだ…」

宮殿が波を打つ…。小さな滴を一滴落としたような波紋が宮殿の中心からキッチョムの足元までやつてくる。湖の枠組みを超え、地に伝わり、丘に連なる崖を波紋が登つてくる。キッチョムには、宮殿が湖と重なつてみえた。その瞬間、湖の中心が天高く巨大な水しぶきを上げると角を持つた白馬が現れた、その馬が一瞬、空中で停止する。

レイジーは地団駄を踏んで嘶いた。

水しぶきの中から巨大な船首が現れたのだ。大理石のように艷を放つ白馬を先頭に立てその帆船は水中から飛び出しキッチョムの前にその巨大な船体を表した。船は船体を湖に叩きつけた。水面が怒号をたて、天に届くかのように舞い上がつた。

「船だ…急がないと…！」キッチョムは叫ぶと同時に手綱を引き、あぶみでレイジーの横つ腹を蹴りつけた「僕は、あの帆船にのるん

だから！』

丘の上から崖のように続く坂道を砂煙を立ち上げ全速力でレイジーは駆け降りていく。帆船は、雲のように真っ白なたくさんの帆に風を受け、水面を滑るように速度を上げ水しぶきをあげている。キッショムはあわてて懐を、ポケットを必死にまさぐつた。指に小さな紙切れの感触があつた。それを取り出して天高く掲げた。もう船の半券ではなかつた。一枚のチケットが吹き付ける風の中、太陽を背にしてはためいていた。白く輝くチケットを頭の上で振りながらキッショムは叫んだ。

「おーい！僕はその船に乗るんだ！！」キッショムの胸が壊れてしまつたと思うくらい高鳴つていた「レイジー、レイジー、近くに港があるはずだ！！」そういうとあぶみに力を入れた。

レイジーは帆船に負けないくらい早かつた。キッショムとレイジーは帆船を見ながらどこまでも走りつけた。そして叫び続けた：

「おーい！僕はその帆船にのるんだあ！！」

バレル・ガードナーはじつと暗い部屋の壁を見つめ何やら考え事にふけっていた。

カールはただぼんやりとそんなガードナー見つめていた。カールはベットに横になっていたのだが、ガードナーが訪ねてくると何とか身をお越し彼を迎えた。カールの顔はほの暗い蠟燭の光のなかでもそれとわかるくらいやつれた顔をしている。まるで凍えてしまふかのように薄い掛布団を引き寄せうずくまつていた。

「おまえも聞いたというのか…？」その、鉄の音を…
「ええ…、たしかに…」カールはそういうながら何度もうなずいている。

ガードナーは赤く縮れたひげをなでた。

「で…、おまえはその音の主を…？」

カールはあわてて激しく首を振った。膝を引き寄せ掛布団をきつく抱きしめた。恐怖が彼の中を駆け回っているのが見て取れる。カールは体に傷一つ負つていなかつた。だからこそ心の傷が彼を苦しめるのである。もし、傷を負つていればその痛みで少しは恐怖が紛れていたかもしれない。ガードナーはそんなことを考えながら立ち上がつた。

「お前は、一二三日大人しくしている…、この事件はすぐにでも解決する。なに…墓守の一人や二人…」ガードナーはそういうながらそれが間違いであろうことはわかつていていた。そして、自分がタムズにして見せた名推理も間違いだつたと認めずに入れなかつた。しかし、何者か判断がつかないままでは不安が募るばかりだ。カールを思つての言葉だった。

部屋を出ようとガードナーがドアに手を伸ばした時だつた。

「あんなふうに…、あんなふうに人を、一瞬にして黒焦げにできるものなのでしょうか…？」声を震わせながらカールがつぶやいた。

目を見開き布団をまつすぐに見つめている。

「不可能…だろうな…。」

「では、あれは…あれは…墓守の仕業なんかじゃ…」カールはまた首を激しく振った、まるで思いついた何かを頭から追い払おうとしているようだ。

「だとしたらなんだというんだ…？いいか、それがわかつたのならこの事件が解決するまで大人しくしていることだな…」いまだカールに理性的にものを考える力があることに、ガードナーは少なからず安心した。あとは時間と…事件の解決が必要だらう…。

カールの妻リゼットは椅子に腰かけてテーブルにもたれかかっていた。階段を叩くガードナーの不恰好な靴音が聞こえると、リゼットは立ち上がり階段を下りてくる黒光りするブーツを見つめた。

ガードナーは階下のリゼットに目を向ける。

「すみませんな、奥さん。少々長居しまして…」

「いえ、そんなことより夫は、カールはどうしたんですか？なんだかみなさん、とても慌ててらして、夫を連れて帰つてくるなりほどんど何も言わずに出て行つてしましましたから…」

ガードナーは階段を降りきると、玄関の扉に歩を進めながらいった。

「その…事件が起こりましてな、一人は顔を焼かれ瀕死の状態、もう一人は誰かもわからないほどに焼き尽くされていましたね。カールは二人目の犠牲者の現場に居合わせたんですね…」

「ああ…」リゼットは口元を両手で覆い隠し、目を大きく見開いた

「ハカラモリが…」

ガードナーはリゼットを見つめた。

リゼットはガードナーに見つめられると目を泳がせて続けた。

「みなさん、そのようなことをおっしゃってましたわ、わたし恐ろしくて…。明日はちょうど金曜日…今日は明日のはずですわ、墓守が寄進品を集めに来るのは…。さつと怒ってるんだわ、町のみんな

がろくなものを寄進しないから…。わたくし明日はなにかいのを見繕つて…」恐怖からかまくしたてるように話し始めたリゼットの言葉をガードナーはさえぎった。

「なに…墓守は関係ないでしきう、そのことはカールも気づいている…。彼は怪我もしておらん。それに頭もしつかり働いていた。二三日休めばもどどおりだらう…。その頃には事件も解決しますよ。ただ、事件が解決するまで夜の外出は控えていただきたい。なにが起ころるかわかりませんからな…」そういうとガードナーは扉を開いてリゼットに向かい軽く会釈をした。扉を閉めため息をつくと髪を撫で、カールの家を後にしたのだつた。

ぼんやりと東の空が白くなつていた。夜は次第に西に追いやられていいくだらう…。当分の間、夜は眠ることができそうになかつた…。「覚悟せねばならんな…」ガードナーはぽつりとそうつぶやくと自宅ではなく自警団の詰所へと足を向けるのだった。

10・スプリング・ヒールド・ジャック

10・スプリング・ヒールド・ジャック

朝日が昇ろうとするころ、光の届くことがない暗い地下の通路。そこに赤く燃える目玉が一つぼんやりと浮いていた。石造りの壁はアーチ状になつていて、どうやらそれは水路らしく四角く切り取った溝があり水が流れていった。その通路はいくつもわかれて蜘蛛の巣のようにグレスデンの町の地下に張り巡らされていた。しかしこの水路の存在を知る者は今となつてはほんの一握り、完全に忘れ去られた過去の遺産であつた。

その蜘蛛の巣の中心は少し広く彼にとつて格好の隠れ場所となつていた。彼の目玉の炎がかすかに瞬き光を強くするとあたりがうつすら明るくなる。目の前に山積みになつた鉄くずをジャラジャラと崩しながら彼はそれを手にとつては眺めていた。

「アイアン…、アイアン…」そう呟きながらただ鉄を眺めている。口から蛇の舌のような炎が鉄をなめあげている。鉄は温度を上げ赤く光る。

彼は口に鉄をほおばると口の端から煙が立ち上つた。彼の体の中で炎が立ち上る音が響き、その音が地下の水路に響き渡つた。

彼は口から鉄を吐き出した、それはゴトリと重たい音を立てて石の上を転がつた。球形の形にえた鉄くずを指の間に挟み持ち上げ目の前に掲げそれを眺めた。

赤く熱を帯びた鉄球…。

その球を眺め、スプリング・ヒールド・ジャックは不敵な笑みをみせるのだった。

『スプリング・ヒールド・ジャック』…彼が生まれたのは海を越えた国、グレートブリテンだった。彼がどのようにあの海をこえたのか。おそらくは誰にもわからないことであろう。彼に聞いてみたところ、彼自身もおそらく覚えていないだろう…。

ただ、ここにひとつ恐ろしくも悲しい物語がある…。

『ヴァルハラの鉱石』と『安息のツルギ』

むかし、イングランドにホイットマンディー・ハウザーという鍛冶屋がいました。彼はとても腕がいいので『キング・オブ・ブラッカスミス』と呼ばっていました。数十人の徒弟に、美しい妻ステファニー、彼はその名声を欲しいままにし、人生を思いのままに生きることができた数少ない人間だったのです。

そして、彼の妻は臨月を迎えていました。もうすぐわが子が誕生する。彼は人生の絶頂期にいたのです。

ですが、ある夜すさまじい嵐とともにやつてきた男が彼の家のドアをノックしたのです。

ホイットマンディーは暖かい居間の椅子に腰かけぼんやりと妻の後姿を眺めていました。つまは暖炉の前の搖り椅子に座り大きなおなかをさすりながら、幸せそうな笑みを浮かべて編み物をしていました。

外では恐ろしいほどの風が吹き荒れ、窓には大粒の雨が当たつて音を立てていましたが、ホイットマンディーの耳にはまったく聞こえていませんでした。この日徒弟たちを早くに帰らせ一人きりの静かな、幸福な時間を過ごしていました。

ふと彼の耳にドアをノックする音が聞こえたような気がしました。『だれだらう…、こんな夜更けに…』

彼は窓を見ました。風が窓を揺らし、雨水が流れ落ちています。『気のせいだらう…、こんな嵐の中訪ねてくるものなどいるものか

…』

そう思つたとき、彼の耳にはつきりとドアを激しくノックする音が聞こえました。徒弟に出るようになつて言おうと腰をあげたとき、みな

を嵐が来る前に帰らせてしまったことを思い出しました。

『ああ…、まつたくこんな時に…』 そう思い玄関へ行こうと部屋のドアへ歩み寄りました。

「あら、どちらへ行かれるんですか？」 怪訝な顔で妻のステファニーが彼に問いかかけました。

「聞こえなかつたのか？ 誰かがドアをノックしただろ？ こんなときに訪ねてくるんだ、よっぽどの急用かもしねない」

「いえ、わたしにはノックなんて聞こえなかつたわ、それにここまでノックが聞こえるはずないわ。外は嵐よ？」

「いや、確かに聞こえたんだ。ちょっと見てくる」

そういうとホイットマンデイーはドアを開き、階下の玄関へ向かつたのでした。ドアを眺めながら歩を進めていくと、確かに鉄のドアノックを激しく叩く音が響いていました。

ホイットマンデイーがドアを開けるとそこに黒いローブを纏つた大きな男が立っていました。青い顔をして堀の深い顔…。男の顔を見つめたとき大きな雷鳴とともに稲光がそとを明るく照らし出しました。すると男の顔が一瞬薄青く透き通り、肌の下に恐ろしい頭蓋骨が透けて見えたのです。

ホイットマンデイーは思わず声をあげそうになりました。しかし声を上げることができませんでした。まるで首を絞められたかのような気分でした。

「夜分遅くすまないな…」 そうこうとホイットマンデイーの目の中を深く見つめるように男は目を見開きました。

「お前にひとつ、頼まれてほしいことがあるのだ…」

ホイットマンデイーは首を振ろうとするのだが体が硬く石のようになつて動かない。まるで恐怖が彼の心を齧しているようだつた。彼は首を縦に振つた。彼はこう決断せざる得なかつた。そういうことでしか体を動かすことができなかつたからだ。

「そうか…」 男は楽しげに笑つた。まるでこれで親友だといわんばかりだ。

「剣を作つてもらいたいのだ」

「ええ、ええ…かまいませんとも、ただ…、いま注文が立て込んでまして…」頭の中でこの仕事断る算段を必死に探しました。

「なに、どれも徒弟にやらせればいい仕事ばかりだ、それよりも俺の持つてきた仕事はお前にしかできない。魅力的な仕事…」男はローブの中から一塊の鉱石を取り出しました。「ヴァルハラの鉱石だ…」男がその鉱石をホイットマンディーに差し出しました。

「ヴァルハラ…」ホイットマンディーは吸い寄せられるように手を伸ばしました。その鉱石はずつしりと重く銀色に輝いています。ぽんやりとあたりに白い光を投げかけながらあらゆるもの光の深渊へと吸い込もうとしているかのようでした。

「そうだ、名前くらいは知つていいだろつ…。神々の宮殿…。英雄たちの殿堂と言われている。戦いに明け暮れた英雄たちの魂を迎え入れ、死してなお戦い続ける定めを負わせる…」男は薄気味悪い声をあげて微かに笑いました。まるで天国と言われる場所でありながらその場所は地獄だといわんばかりの冷笑です。

「…」これで…なにを作れと…」ホイットマンディーは信ぜずにはいられませんでした。目の前の鉱石の輝きは確かにこの世のものと思えなかつたのです。そして彼の心の中の好奇心、野心、自尊心…、すべての人間的な感情がヴァルハラの存在を求めているのを感じ取りました。

「剣だ…『安息の剣』…」男はそういうとまた懐から何かを取り出した。それは薄汚れた一冊の本でした「お前の知りたいことはここにすべて書かれている…」

「ああ…」ホイットマンディーは首を振った。「おまちください、安息の剣とは…『レクイエムソード』と言われているもののことのございましょう。この世にひとつといわれている…それがどのようなものかも知られていません。ただの伝説…」

「ならば、その眼で確かめてみるがいい」男は手に持つた本をホイットマンディーのまえに突き出した「さあ、手に取れ、契約を交わ

「そうじやないか…」本を手に取りそれを手の内で開いた。

ホイットマンディーはだまつて書物を閉じる、ヴァルハラの鉱石を書物の上にのせ差出した。

「どうやら…わたしには無理のようだ…。この書物には何も書かれていない…白紙だ…」

ホイットマンディーはくやしさと恥ずかしさをその表情に浮かべた。屈辱…まるで自分が否定されたかのようだ。自分は選ばれなかつた…。

男がそれを受取らうとしたときホイットマンディーが身を引いた。汗が額に流れ、口惜しいかのように身をこわばらせている。渡したくはなかつた。

ヴァルハラの鉱石の輝きを見て心動かされない鍛冶屋がいようか…？伝説の剣と聞いて心動かされない鍛冶屋がいようか…？わたしのように一流の腕を持つならなおさら…たとえ、依頼人がこの悪魔のような男であつても…。

「のままわたしのような一流の鍛冶屋が鉄や鋼を打ち続けて一生を終えてしまうのか？

わたしのほかにこの鉱石を扱える人間などいないはずだ…！！

「どうした…？作りたいのだろう…。諦めきれぬのだろう…。俺はこの時をどれほど待ち望んでいたことか…」

男は冷笑交じりに話する。そして言った。

「教えてやるが、レクイエムソードは唯一、不死を断つことができる剣だ…。」

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『インモータルキラー』もしくは『アンデッドキラー』のこと

不死…。その言葉を聞いてホイットマンデイーは首をかしげずにいられませんでした。伝説のツルギ…それが…。この世に不死のものなど存在しない。それがホイットマンデイーが出した答えたのです。

「不死など存在しない…。そう言いたげだな…」男は笑みを絶やさずいいました。まるでホイットマンデイーを小馬鹿にするように笑っています「教えてやるつ…。思えば言つたな、この世に一つだけ安息の剣は存在すると…。その一本を後生大事に…わが物顔で…やつが、やつが持つているんだ。不死なるものがな…！」男は笑つていましたが、月明かりに照らさらる泉のよう澄んでいたブルーの瞳が、燃え上がるような赤色に代わり、その瞳が怒りに満ちているのがホイットマンデイーにはわかりました「おまえが知らぬだけだ、この世にも、あの世にも不死のものなどごまんといいるのだ。わたしはそれが我慢ならんのだ！」男は足を一步踏み出し、ホイットマンデイーに詰め寄ります。

ホイットマンデイーは恐ろしさに身をすくめ、ただただうなづきながら尋ねました「あなたは、あなたはいつたい何者なのですか…！？どうしてそのような…」

「決まつているだろう！不死のものを根絶やしにするのだ…！…おれが何者か、だと…！笑わせるな…！お前が俺に名を『えり…！』不死を断つ者『それが俺の名だ…！』

ホイットマンデイーの震えていた膝がとうとう糸を断たれたように折れ曲がり床に腰を落としてしまいました。男が腰を落とし、さらにおひつトマンデイーに詰め寄ります。

「契約の時が来たのだ…。さあ、書を開け…。そしてお前の手を差

し出すんだ…！」男の恐ろしい瞳が見開かれました。

ホイットマンディーは声にならない悲鳴を上げながら震える手で分厚い書物の表紙をなんとか開きました。そして力の入らない腕をなんとかあげ、手の平を男に向けました。腕は恐ろしく震え、制止させることができません。涙で視界が揺らめき今にも頬をつたい涙が落ちてしまいそうでした。

男がホイットマンディーの腕を驚掴みにしました。とても強い力で抵抗などできやうもないくらいです。男は手のひらを上に向けさせ、暗い闇のようなロープの影からもう一つぱうの腕を出しました。人差し指を伸ばすとホイットマンディーの手のひらに一筋の線を引きます。

ホイットマンディーの手のひらはまるでザクロがぱっくりと口を開いたように傷をつくりました。肉の断片、白い骨が見えたかと思うと血が吹き出し、不快な音を立てて白いページの上に滴り落ちていきます。ホイットマンディーは恐ろしそうに震え、頬を涙がつきました。

赤くページが染まると同時に漆黒の文字が浮かび上がり始めました。まるで蛆が這うようにじわりじわりと浮いてきます。ホイットマンディーの血は染み渡り、どうやら数ページを赤く染め上げたようでした。

「どうだ… 文字が浮かび上がったではないか…、お前が『安息の剣』を完成させるんだ…、もう、後には引けない、わかつたな…」男の瞳の燃えるような赤が、波が引いていくように冷たいブルーに変わつていきます。男は立ち上がり笑みを見せました。

「ホイットマンディー…俺は完成を心待ちにしているぞ…」恐ろしいその男の笑い声がホイットマンディーの耳に響きました。男がドアに向かい一步前に踏み出したその時、地上を搖るがすように雷鳴が引きわりました。まるで月が落ちてきたかのようにすさまじい音です。外は明るく瞬いたかと思うと、外に踏み出した男の体は一瞬にして光の中に焼き消えてしまつっていました。

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『睡魔』

その日からホイットマンデイーはまるで人が変わったように鉄のハンマーを振るい、ヴァルハラの鉱石を鍛え続けました。高炉の前でまるで炎を纏つたかのように赤く照らし出されるホイットマンデイーの姿は徒弟、そして妻ステファニーでさえも声をかけることがはばかれるほど恐ろしい姿に見えました。

ホイットマンデイーのそばにはあの書物が投げ出されていました。彼はその書物に書かれている通りに行動しました。ページが進むと自らの体を傷つけ、血を書物にささげるのです。彼の体のいたるところに傷ができていきます。彼の体のどこを傷つけ、どこに血がほしいのかすべては書物に指定されました。

彼の中には功名心と自尊心が渦巻きます。ヴァルハラの鉱石の輝きの先にはあたかも神が存在しそれが自分と重なって思えるのです。神なる存在、そう考えたとき自らの腕がいままでそれに届かんとしているのを感じ取ることができました。

そしてもう一つ、彼の感情を支配するものがありました。それは言い知れぬ恐怖です。

彼は寝る間を惜しんで高炉に向かいましたが、彼も人でした。体の力は時とともに失われ、強い睡魔が瞼を重くします。

彼は恐ろしい悪魔に追わされていました。地獄の鬼でした。睡魔に負ければまるで別のドアが開いたかのように夢の世界へ落ちてしまいます。しかし、それは夢ではありませんでした。彼にはすでに夢も現実もありません。ヴァルハラの鉱石を鍛え続け、地獄の鬼から逃げ続けるのが彼がもつことができる唯一の人生だったからです。

地獄の鬼は睡魔に負け瞼を落とした時にやります。落ちた瞼は一瞬のうちに軽くなります。しかし瞼を開くとそこは針のような岩が地面から突き出している岩と砂だけの世界でした。その岩にか

がみ込み急いで身を隠します。

やがて翼をはためかせる音が遠くから聞こえ始めます。ホイットマンデイーは両腕をにぎりしめ、拳を口に加え強くかみしめます。恐怖で声を上げるのをそいやつて我慢するためです。痛みで恐怖を打ち消すためでもありました。彼は岩陰ですつと息を殺します。

「ホイットマンデイイイイ… ホイットマンデイイイイイ…」

ホイットマンデイーの肩が恐怖で震えています。

地獄の鬼の声は翼の音が大きくなると同時にしだいに近づいてくるのです。

「ホイットマンデイイイイ… いるんだひつ…、やこひ…。今日も来てるんだひつ…」

彼は立ち上ると同時に死に物狂いで走り出します。大きな岩をかわし、小さな岩を飛び越えました。自分の呼吸が荒々しく耳に響きます。ホイットマンデイーの心は今にも自分の首が胴体から切り離されるような思いに支配られていました。

「ホイットマンデイイイイ…！」

突如として、翼の羽ばたきが風に揺れる木々のような激しさに変わりました。

ホイットマンデイーの首が飛んだとしてもおそらく胴体だけでも走り続けることができるほどに、彼は必死に走り続けました。

「ぐああああ…！」

彼の叫び声が岩場に響き渡りました。それは恐怖とはげしい痛みから出た叫び声でした。彼のひざ下に岩がぶち当たったのです。彼は地面に転がり痛む足を抑えました。転がりながら翼を広げ恐ろしい速さで向かってくる地獄の鬼を視野に捕らえました。

褐色の肌、炎を纏っているような真っ赤な翼がはげしく風を捲いています。足の指が手の指のように長い、きっとその足でホイットマンデイーを捕まえるつもりでいるのでしょうか。手には鋼のようご真っ黒な長く伸びた爪が生えています。それはホイットマンデイーを切り刻むため。そして首から徐々に顔に向かって緑色に変色して

いました。瞳は白目の部分がなく鉄の球をはめ込んだような漆黒の瞳をしています。緑色の恐ろしい顔には一本の歪んだ角が生えていました。

「来るな……来るなああああ……」ホイットマンディーはそう叫び、恐ろしさに耐えかねて口を開きました。

「おいおい……しつかり走れ、世話を焼かせるな……」ホイットマンディーが口を開くとそこにあの黒いロープを纏つた男の背中がありました。男はホイットマンディーと地獄の鬼の間に立っています。ちらりとホイットマンディーに横顔を見せるといいました。

「今日はもう少し走れると思ったんだがな……。いいか、睡魔が訪れるまで走り続ける……いつもどおり走り続ける、振り向くんじゃない……」

ホイットマンディーは立ち上がりました。手には血がついていました。膝から血が流れ出しています。

男はこの恐ろしいもう一つの現実の世界でかららず彼を助けにあらわれる所以でした。彼は無言でなんどもうなづくと走り出しました。ひどく傷む膝を忘れたかのように必死で走りました。恐ろしい鬼の声が聞こえます。

「またここで待っているぞ……ホイットマンディイイイイ！ホイットマンディイイイイ！」

彼は恐怖からでしようか、好奇心からでしようか、あるいは男の身を案じてでしようか、いつも彼を助けに現れるあの男のことが気になり、ほんの一瞬後ろを振り向きました。

ローブの男が鬼の首を掴んで持ち上げていました。鬼は首を絞める腕を両腕で握り返し、羽をばたつかせ、足の指で男を引きはがそうともがいています。

「ぐう……離せ、離せ、お前」ときが俺様の邪魔をするんじゃない……。たかが死神の分際で……」

ホイットマンディーにはそう聞こえました。いや、一人の姿を見

だけで何も聞こえなかつた。彼は必死にそう思おうと努めました。
ただひたすらに張り続けることだけを考えました。彼を救うことが
できるのはたつた一つ　。睡魔だけ、だからです。

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『運命の日』

そしてとうとう運命の口がやつてきました。

ほんの数日前まで血色のよかつたホイットマンディーの体はやせ衰え、頬の肉は削り取られたようになくなっていました。裸足で部屋を歩く音がひたひたと軽く音を立てています。

自らの首を切り大量の血を書物にささげるとページのすべてが赤い血に染まつたのでした。乾いた血に黒く染まりあがつた布を首に巻きつけ、もうひとつとする頭でページをめくります。

少なすぎる…。彼は思いました。残りのページ数はほんの数ページです。しかし彼の鍛え上げた剣は、鋭さ、強さはまれに見るものでしたが、丈があまりにも短かすぎました。剣の切っ先はなく、まるで溶けたかのように波をうつていたのです。ここでページが終わつてしまつては完成することができません。ヴァルハラの鉱石もなくなつていきました。

彼は赤く立ち上る高炉の炎に書物を投げ入れたい気分に駆られました。なぜもつと早く気付かなかつたのだろう…。彼は怒りに震えました。彼は高炉を睨み付け、書物をいまにも投げ入れんばかりに高々と頭の上に振り上げました。炎がばげしく揺らめくさまをその眼につし、彼は大きなうめき声をあげました。しかし彼には書物を炎の中に投げ入れることはできませんでした。書物はあらぬ方向に投げつけられ、壁に当たると音を立てて地面に落ちました。

ホイットマンディーは頭を抱え、小さく唸りながらぼんやりする頭で考えようとなります。

「あいつが、待っているんだ…地獄の鬼が、あの場所で俺を待つているんだ…」彼はひたすらそのようなことをつぶやいています。そのおりでした。もし、剣を作るのをやめても地獄の鬼は彼を待つてゐるでしょう。彼にできることは剣を完成させる以外に道はありません。

ませんでした。

怒りが恐怖に変わるとホイットマンディーは頭を抱える手を力なくおろし、ふらふらと立ち上がりました。そしてひたひたと足音をたて書物に歩み寄りました。まるで地獄の亡者をながらの歩く姿からは生命の息吹を感じることが全くできません。

彼は震える手で書物を拾い上げ、開きました。

「これ以上…、わたしから何を奪おうとこうのだ…」彼はそうつぶやくとページをめぐりあげます。一瞬、彼の目に光がともりました。希望を見出したともいえるその輝きは、剣の完成を予感させるものでした。彼は笑みを浮かべました。剣は完成する…。

そして彼はさらにページをめぐりました。

彼は石のように固まりました。炎の光が照らしだす壁はゆらゆら揺れています。その壁に囲まれた薄暗い部屋の中で彼の背中はピクリとも動かなくなってしましました。みるみるうちに彼の瞳から光は失われました。彼の耳に炎が立ち上る音が聞こえます。そしてあろ「う」とか叫び声をあげながら、書物を高炉の中に投げ入れたのです。

炎が渦を巻き書物を飲み込み、まるでホイットマンディーの叫び声に呼応するように激しい音をたてました。

ホイットマンディーは膝をつき崩れ落ちました。床に額を何度も打ち付け血らの血を床に広げました。彼はただひたすらに叫び声を上げ続けることしかできませんでした。

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『運命の日②』

徒弟の一人がホイットマンデイーの畳敷の居間で同じ場所を行ったり来たりあたふたしながら心配そうに靴音をたてていました。ホイットマンデイーの妻ステファニーが産氣づき産婆を慌てて連れてきたものの、ステファニーのつめき声を聞いた徒弟は心配で居ても立っても居られないでした。

こんな時にわたし一人とは…。徒弟が順番に泊まり込みステファニーについていたのですが、まさか自分の当番の日に産氣づくとは思つてもいませんでした。心細さからかホイットマンデイーのことを考えました。ここ最近は作業場にこもりつきり、呼びに行こうものなら、いえ、扉をノックしようものなら恐ろしい声で罵声を浴びせられるのです。

自分の子供が生まれるというのに…親方はいつたいどうしてしまつたんだろう…。

そんなことを考えながら両手を組み合わせたり頭を搔いたり、後は産婆に任せ、神に祈るのみでした。

「ギヤアアアアアアアア…！」

徒弟は驚いて顔を階段の方に向けました。とても恐ろしい叫び声…。徒弟の肩は飛び上がり背筋がまるで凍りついたように冷たくなりました。

しかし、まるで空耳だったかと思えるほどにあたりは一瞬にして静寂を取り戻しました。

居間を出てよくよく階上を見てみます。階上はひす暗くとても静かでした。

手すりを握り耳をそばだてながら階段を上がります。

子供の泣き声だろうか…？生まれたのかな…？でも、でもあれは女のかされたような叫び声だった。老婆の…産婆の叫び声だ…。

徒弟はとても恐ろしくなりました。それでも階段を上ると産婆が

入っていた寝室へと向かいました。廊下を進み、寝室のドアに耳をあてると中の様子を伺います。しかし、物音ひとつ、赤ん坊の泣き声も聞こえませんでした。ステファニーに苦しむ姿を思い出しました。

あ、あんなに苦しそうだったのに…。徒弟は思いました。
ドアノブに手をあてると中の様子をうかがいながら静かにドアを開いていきます。

「フフフ……」微かにステファニーの笑い声が聞こえました。

ドアを開き、部屋を覗き込むとベットで血の付いた布を抱き幸せそうに笑みを見せるステファニーの姿が見えました。

徒弟は、思わず胸を撫で下ろしました。

ああ、さっきの叫び声は私の空耳だったか…。もしかしたら、赤ん坊の泣き声と聞き間違えたのかも…。

一瞬胸を撫で下ろしたものの赤ん坊が泣き声を上げていないことには気がきました。生まれた赤ん坊はケツを叩いてでも呼吸させなければいけないと、誰かに聞いたことがあります。

徒弟は慌ててドアを開きステファニーに駆け寄ろうとします。その時足元にあつた何かにつまづきました。見下ろすとそこに産婆が倒れています。口から泡を吹いて倒れるなんて…。徒弟は思いましたが、

いまは産婆どころじゃない赤ん坊が産声を上げていないのです。

徒弟は産婆から目を離すと急いでステファニーと赤ん坊へ駆け寄りました。

「奥さん、大丈夫ですか！？赤ん坊は、赤ん坊…、うああああ…
！」

徒弟は思わず、唸り声をあげてベットから飛びのきました。足の力が抜け、腰を落としてしまいました。足を蹴りなんとかベットから離れていきます。後ずさりながら産婆を見ました。あの赤ん坊を取り上げたのか…。それで、それで…。さっきの叫び声はやはり産婆だった！！

赤ん坊の顔は血色の悪い緑色、額に一つの小さな突起がついていました。目元は目玉がなく一つの穴がぽつかりと開いているだけ、鼻はなく唇はなくへの字に曲がった黒い穴があるのみでした。

徒弟はステファニーが抱いている布きれから褐色の小さな足がみ出すのを見ました。不自然に長い指が力なく垂れています。

「ああ…ああ…」

徒弟はそれを見ると恐ろしさで振るえあがり、なんとかドアのもとへ行こうと必死に床を蹴りつけました。

しかし、徒弟の背中はドアには届きませんでした。なにものかの膝にぶつかったのです。徒弟は背中の何者かに目を向けました。

その何者かに見覚えがありました。ですが、それがホイットマンディーだと気付くのにとても長い時間を必要としました。それほどホイットマンディーはやせ衰え、まるで地獄の亡者のごとく姿を変えていたのです。手には短い作りかけのような剣を力なくぶらりとぶら下げていました。ぶらぶらと揺れる剣は芯の部分が美しく銀色にぼんやりと輝き、刃の部分が黒く重たい光を放っています。

「生まれたのか…。生まれたんだな…」ホイットマンディーは力ない足を踏み出しました。ゆっくりとベッドのステファニーと赤ん坊のもとへ歩み寄ります。

「ああ、あ…、親方それが、それが…」徒弟は何とか足を引き寄せ四つん這いになると歩を進めるホイットマンディーの足に手を伸ばそうとします。しかし震える腕はホイットマンディーには届きませんでした。

ホイットマンディーのだらりと下げる腕の筋肉が引き締まるのが徒弟の目に写りました。ホイットマンディーにきつく握りしめられた剣が持ち上がっていくのです。

「俺の子が生まれたんだな…」

ステファニーは目をあげました。

「ええ…あなたと私の子供…」そういうとステファニーは抱きしめていた手を緩め赤ん坊を彼に差し出しました。

ホイットマンディーの目が恐ろしいほどに見開かれました。今にも目玉がこぼれ落ちるかとほど顔をこわばらせ、唸り声をあげました。まるで鬼だ…。地獄の鬼だ…。私を追つてきたのか…。私の子供に成り代わったのか…。

ホイットマンディーの剣を持つ手が恐ろしく怒りに、悲しみに震えました。

あいつはこの時を待つていたのか…。はじめからこうなることを知っていたんだ…。わたしが…、この手でわが子の命を『安息の剣』に差し出すことを願つて…。

彼は表情を持たない緑色の顔を、褐色の肌を睨み付けました。

いまさら未練などあるうか…。鬼だ…鬼が私を追つてきたのだ…。この鬼がわたしの子であるはずがない…！

ホイットマンディーは剣を高々と持ち上げました。いまにもホイットマンディーが剣を振り下ろそうとするときでした。

「なにをするんですか…！」

徒弟はホイットマンディーの背後から腕をつかみ、剣を握るホイットマンディーの手に手を重ねました。

「…離せ…離せえ…！」ホイットマンディーはそのやせ衰えた腕からは想像もできない力で徒弟の腕を振りほどきました。そして、床に転がろうとする徒弟に剣を振るいました。徒弟の顔から血がほとばしります。顔を手で覆い、叫びながら床の上を転がりました。「おまえにこの剣の偉大さがわかつてたまるものか…お前のような徒弟にできぬ仕事だ！おまえのように人の技術を盗むことばかり考えてるやからがこの剣に触れるなど百年はやいわ！これは俺の名誉だ！俺の栄光だ！触れさせるものか…。出でいけ、出でいくんだ！お前の薄汚い血で、命で…、そんなもので私の剣をけがすんじゃな

い…！」

徒弟は切られた顔を右手で抑えています。指の間からおびただしい血が流れ落ちていきました。唸り声をあげながら床に這いつくばるとドアに向かつてずるずると床を這い進みました。

ホイットマンディーは田をステファーーに向きました。彼女は赤ん坊を抱きしめ、ホイットマンディーに背を向けています。その背中は震えています。

「出せ……、出すんだ……」

ステファーーは必死で首を振りました。

「…出すんだ…！」

ホイットマンディーはステファーーの肩を掴むと強引に体を引き、赤ん坊を奪おうとします。

「いやです！…どうして…どうして…！？」

「鬼だ……この剣にその鬼の魂を差し出すんだ…！」

「違います、この子はわたしの…わたしとあなたの子供です…！」

「こんなに、こんなに愛らしいのに…！」

ステファーーはホイットマンディーの腕を振り払いました。ホイ

ットマンディーが掴んでいた肩にはうっすら血がにじんでいます。

「愛らしい……？この子が愛らしいといつのか…？愛しているとい
うのか……？」

ホイットマンディーの瞳が涙でうつすら濡れ、剣を持つ手が震え
ました。

「ええ…どうして愛されにいられるのですか…？…」こんなに愛らし
いのに……「ステファーーの長く美しい指先が赤ん坊のへの字に曲
がった口元に触れました。赤ん坊の口は柔らかく動き指先を探して
動いています。そのときかすかに「アア…」という小さな声を発し
ました。

「男の子が生まれたら、名前は「カスパー」…、そうでしたわね…。
カスパー・ハウザーそれがこの子の…、わたしとあなたのたつた一
つの宝物…」ステファーーは大粒の涙をためどなく流し、赤ん坊
を強く抱きしめました…。

「おまえは愛しているのか…。愛し続けることができるのか…。
わたしは…、わたしはなんてことを……！」

剣がホイットマンディーの腕から離れ床に音をたてました。彼は

ベットにかけていた足を床におろし、崩れ落ちました。涙はとめどなく流れ、床にいくつも黒いしみをつくるのでした。

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『ホイットマンディーの死』

ホイットマンディーの人生の終わりが近づいていました。

彼は恐ろしい夢から解放されたもののその体からはすでに生命の輝きは失せ、地下にカスパーを閉じ込め、ステファーニとともに暗い地下室で暮らす日々となりました。ステファーニはよほどのことがないかぎりカスパーから離れることはしませんでした。ステファーニが町に出るとき、屋敷で食事を作る時などを見計り、彼は隠しておいた未完成の安息の剣を握りしめ物思いにふけることがありますたがカスパーのうめき声を耳にすると我に返り笑うのでした。

「恐れることはない……わたしはお前の命をつばったりしない……、ただ眺めずにはいられない……それだけだ……」

ホイットマンディーにはどうしても安息の剣を破壊することができませんでした。すでに多くのものが失われていました。徒弟を失い、財産のほぼすべてを失っていました。「ホイットマンディー・ハウザー」この名前も狂気のブラックスミスという汚名を着せられ町中に知れ渡つていたのです。

ただ、残されているものがありました。それは妻ステファーニと息子カスパーです。いまはそれで十分でした。彼はすでに死期を悟っていました。幸せかもしけない……昔の徒弟時代に帰つただけだ……ふとそのようなことを考えることがありました。ですが、自分が死んだら……そう思うと不安で仕方ないのでです。

彼は高炉に向かうことを決めました。

カスパーのためにできることを考えたのです。そして彼のために鉄の仮面を作りました。つなぎに皮を使い、うまく成長に合わせて形が変わるようになります。顔さえ隠してしまえば普通の人間として、きっとうまくやつていける……そんな思いがありました。

しかし、カスパーに仮面をつけるとまもなく、揺り椅子に揺られながらひつそりと彼は息を引き取りました。

11・スプリング・ヒールド・ジャック・『I・R・O・N』

ステファニーとカスパーの二人きりの地下室での生活が始まりました。カスパーはすでに四つ足で立ち上がり驚くほど器用に走りました。髪ほどに成長していました。ステファニーは驚くほどはやく老けてしまっていました。皺こそ増えてはいないものの肌のつやは失い、黒々とした髪には白い部分が目立ち始めました。昔の彼女の美しさはすでに失われていたのです。

しかしステファニーは幸せでした。表情こそ仮面に覆われて見えないものの、カスパーは感情を体で表現してみせるのです。飛んだり跳ねたり転がったり、彼は彼なりにステファニーに何かと伝えようと必死だったかも知れません。

ある日のことです。じつとり湿った薄暗い地下室の床に木製のアルファベットの積み木が広げられていました。ステファニーはどの親もするように、それを彼に与えたのです。残念ながら彼はそれに興味を示さず、投げ出されたままとなっていました。彼は目が見えなかつたのです。

ステファニーはアルファベットの文字を彼の手のひらに乗せ形をなぞらせようとするのですが、しばらくするとカスパーはそれをほうりなげ、小さなガラクタの鉄を取り出し別の遊びを始めてします。

「だめね……」ステファニーは笑いました。カスパーの子供らしい一面が彼女に笑みをもたらしているのでしょうか。「それは鉄よ……、カスパー。アイアン、I・R・O・N……」彼女はアルファベットをつぶやきながら木製の積み木で地面に文字を作りました。ぼんやりとその文字を眺めていたときでした。

「アー……アー……」

ステファニーはふと目を上げ、カスパーを見つめました。

「アー……アン……」

「そう……。アイアン……」彼が生まれて初めて言葉を発しようとしました。彼女は口を両手で覆うと瞳を涙で濡らし、カスパーを見つめてじっと待ちました。

「アイ……アン……」

「そう、そうよ……。おいで、カスパー」そういうと涙を流しながら彼を引き寄せ、膝の上に抱きました。そして「一」の積み木を取り上げるとやさしく手のひらにのせませました。

カスパーは不思議そうにそれを手の内でもてあそびます。

「I……。R……。O……。N……」順番に手の内に乗せ、何度もアイアンと繰り返し言葉を発しました。「アイアン……あなたのお父さんが大好きだったものよ……」

「アイ……アン……」

彼がそうつぶやくとステファニーは声をたてて笑みを見せました。カスパーはその声を聞き何度も、アイアンと繰り返し、木製の積み木を手の内で転がして遊ぶのでした。

どれくらいそうしていたのでしょうか、いつのまにかステファニーは眠っていました。ふと自分の膝が軽くなり、カスパーのぬくもりが感じられなくなつたのに不安を感じました。うつすら目を開くと耳に苦しそうなうめき声が聞こえました。ステファニーは慌てて体をおこしうめき声が聞こえる方へ眼を向けました。

カスパーが苦しそうに胸を抑え、かがみ込んでいます。まるでのどに何かをつあらせたかのようにもがき苦しんでいます。

「カスパー！ カスパー！ どうしたの！？」

ステファニーは驚き、彼に駆け寄り声をかけました。仮面の口金がずらされており、一文字にきつく結ばれた口が見えました。何かを口に入れたのは明らかでした。子供がなんでも口に入れる癖があることをいまさらながらにステファニーは思いだしました。きっと積み木を口に入れたのに違ひありません。

「出しなさい、カスパー……！」ステファニーは彼を抱き上げ背中

を叩こうとしました。そのとき彼の口の端から煙が立ち上り始めました。腹部から喉にかけて炎が立ち上るうつうな、激しうなりが響いています。彼女は驚き、はげしく彼の背中を叩き口の中のものを吐き出させようとします。

カスパーはもがき、彼女の手を振りほどき逃げ出すと、水がためられた桶に駆け寄りました。一瞬にして白い蒸氣が激しい音をたて立ち上りました。カスパーの肩が白い蒸氣の中で激しく上下するのがステファニーには見えました。慌てて彼の仮面を覗き込みました。カスパーは何事もなかつたように桶の水をかき混ぜています。煮えたぎるよう泡立つ桶の水をもて遊んでいるように見えましたが、そこから腕を上げると手のひらに鉄の塊を持っていました。

ステファニーはそれを見て驚きました。きらきらと銀色に輝くそれは「R」の形を持つている鉄でした。それはとても鉄とは思えないような輝きを放っています。足元に目をやると「I」の文字が落ちていました。それを拾い上げる手にずつしりと重く重力がかかります。木製の積み木を似せて作られた鉄の積み木は木製のそれよりも重くとても滑らかでした。

カスパーは彼女の手からIの文字をとりあげると「I」「R」と並べました。

「アイアン…アイアン…？」

「あと…「O」と「N」ね……」

カスパーは鉄を探してうろうろと歩き始めました。手探りで落ちている丸い鉄クズを見つけだし、口に入れ頬を膨らませると、ステファニーに顔を向けました。飴玉をなめるように口の中でももごもごと転がしています。

「ああ…、あなたはきっと腕のいい鍛冶屋になるわ。お父さんに負けないくらい……」ステファニーは「R」の鉄の積み木を見つめました。「だって…、こんな素敵なお積み木みたことないもの……」ステファニーは積み木を拾いあげると、もといた場所に腰を下ろしました。

「カスパー、あなたが大人になるまでたっぷり時間はあるわ。眠りましょ…。さあ、続きは明日にして眠りましょ…。今日はなんだからうれしいことばかり…。ママのそばに来てくれないかしら…？」

カスパーは頬を鉄で膨らませながらステファニーの胸にもぐりこみました。もごもごと口を動かしていましたがやがてかすかに寝息を立て始めました。ステファニーは彼の口の中の鉄を取り出すと彼の横に寄り添い目を閉じるのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274x/>

墓守キッショムのおとぎ話

2011年11月26日18時46分発行